琉球大学学術リポジトリ

ブラジルにおける沖縄県出身移民の職業変遷－農業を中心に－

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島袋, 伸三, 米盛, 徳市, Shimabukuro, Shinzo, Yonemori, Tokuichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/15607

ブラジルにおける沖縄県出身移民の職業変遷

―― 農業を中心に ――

On Occupational Changes and Succession among Okinawan Immigrants in Brasil —Agriculture—

島　袋　伸　三
米　盛　徳　市

目　　次

ABSTRACT …… 58
Ⅰ 序 …… 59
Ⅱ 職業変遷の概略 …… 59
Ⅲ 農　業 …… 62
1 移民と農業生産物 …… 65
(1) コーヒー（café） …… 67
(2) サトウキビ（cana de acucar） …… 73
(3) 棉花（algodão） …… 74
(4) 米（arroz） …… 75
(5) 果樹（frutas） …… 76
(6) シャーカラ：蔬菜（verduras） …… 79
(7) その他の作物：雑作 …… 80
(8) 牧牛（gado bovino） …… 81
(9) 養豚・養鶏（criacão de suinos e avicultura） …… 81
(10) 林業活動（extrativismo vegetal） …… 81
2 移民と職業の地位 …… 84

(1) 手つだい…… 92
(2) 従業員…… 93
(3) コロノ労働者とカマラーダ…… 96
(4) 請負（contrato）…… 102
(5) 小作農（parseira）…… 103
(6) 歩合作（meieiro）…… 105
(7) 自作農…… 106
(8) 農業の共同経営…… 108
Ⅳ 農業生産活動からみた移民の職業および地位の変遷の時系列分析…… 109
Ⅴ 総 括…… 116

謝 辞…… 119
後 記…… 119
注 …… 119
参考文献…… 120

ABSTRACT

This paper is concerned further with a discussion of the occupational changes and succession observed mainly among the farm laborers of the Okinawan immigrants in Brasil based on "A Research Report on the Okinawan Immigrants in Latin America," published in March 1981. At the same time it intends to trace, describe and analyze the processes of their earning livelihood in *fazenda* and *colonia* (shokuminchi).

The immigrants frequently changed occupations and status of labor such as *camarada* and *colono* in the beginning, and encouraged themselves to promote their status to that of share-croppers

and tenant farmers, etc. Then, in agricultural sector, they reached the status of farm (*sitio*) owners.

In the process of changing occupations and status the immigrants often migrated from farm to farm and from one place to another for a better income. From 1908 to the 1940s most of them were engaged in coffee farming, which was followed by rice, sugar cane, cotton, fruits and vegetables, etc. After the late 1940s they left the farms and migrated to urban areas where they became involved in secondary and tertiary industries. Some of them still continue farming in the rural areas, whereas, those who are engaged in farming in and near urban areas have become *chacara* farmers.

I　序

既報「南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究[1]」(1981年3月)ではブラジルにおける沖縄県出身移民の職業変遷等について「調査集計表」の統計資料を概説するのみにとどまり、具体的考察を行う機会がなかった。本稿では特に職業変遷に関して若干の考察を行い戦前移民を中心にブラジルにおける沖縄県出身移民の生活プロセスの跡づけの一端を試みたい。なお、調査地の選定・サンプリング・調査方法・調査地の概説等については上記の報告書で記述説明してあるのでここでは省略する。

II　職業変遷の概略

現地におけるアンケート調査で自由聴取法により出現した職業は、ひとまず一般に使われている産業分類を採用し、農業、林業、水産業、鉱業、建設業、製造業、卸小売業、金融・保険、不動産業、運輸・通信、サービス業、電気・ガス・水道、公務員、その他、無職の15分類のなかで小分

類した。第1表に示した小分類はペルー・アルゼンチン・ブラジルの3ケ国の職業を包含しており、幾つかの職業はそれぞれの国において出現頻度が極めて低いかあるいは全く欠落したものがある。

第1表　職　業　分　類

A　農　業
- 01　米
- 02　コーヒー
- 03　棉　花
- 04　サトウキビ
- 05　野　菜
- 06　果　樹
- 07　花　卉
- 08　その他の作目（造園）
- 09　牧　牛
- 10　養　豚
- 11　養　鶏
- 12　その他畜産（養蚕）

B　林　業
- 01　薪炭業
- 02　その他

C　水産業
- 01　漁　業
- 02　養　殖

D　鉱　業
- 01　採　鉱

E　建設業
- 01　土木工事
- 02　建築工事
- 03　大工・左官
- 04　電　工
- 05　掘　井

F　製造業
- 01　食料品（パン・飲料・調味料・アイスクリーム・肉・麺・コーヒー・精米・製粉）
- 02　繊維・衣服（縫製・洋裁・仕立傘・帽子・紡績）
- 03　木材・家具（木工・家具・箱製造）
- 04　出版業（出版・印刷・新聞）
- 05　金属・機械（鉄工・ブリキ・カジヤ・自動車部品）
- 06　その他（製油・石せん・ゴム・レンガ・楽器）

G　卸・小売業

01　卸業（卸・仲介・仲買・貿易・セアーザ）
02　百貨店・スーパー（ロージャー・スーペルメルカード）
03　衣料身のまわり品（バザール・衣料品・古着・反物・靴・アクセサリー）
04　飲食料品（青果物・八百屋・豆腐・肉・牛乳・パン・菓子・パステース・氷・米・魚・酒）
05　飲食店（レストラン・カフェ・バール・茶店・果汁店・焼鳥屋）
06　雑貨店（日用雑貨・食料品・煙草・薪炭）
07　家具・建具（家具・建材・金物・家電）
08　自動車小売（自動車・部品）
09　その他の小売（薬局・化粧品・花・ガス販売・給油所・おもちゃ・土産品・文房具・農機具・空ビン・箱）
10　フェイラー＝F　メルカード＝M

H　金融・保険

01　銀　行
02　ロッテリア（宝くじ）

I　不動産業

01　貸家業
02　不動産

J　運輸・通信

01　運送業（タクシー・船員・ガレガドール）
02　旅行社

L　サービス業

01　ホテル（旅館・貸間・下宿）
02　洗染業（洗濯・染色）
03　理容・美容・浴場
04　奉　公（皿洗い・家事）
05　事務職員（組合・事業所）
06　修理業（自動車・自転車・時計）
07　教　育（学校・教育）

08　沖　仲　仕
09　そ　の　他（写真・屠畜・調教師・通訳・指圧師・ダンス場・洗車・設計士・弁当運搬・空手道場）

N　そ　の　他
01　家事・軍事工場

R　無　　職
01　隠居・無職・失業・休職

K　電気・ガス・水道

M　公　務　員

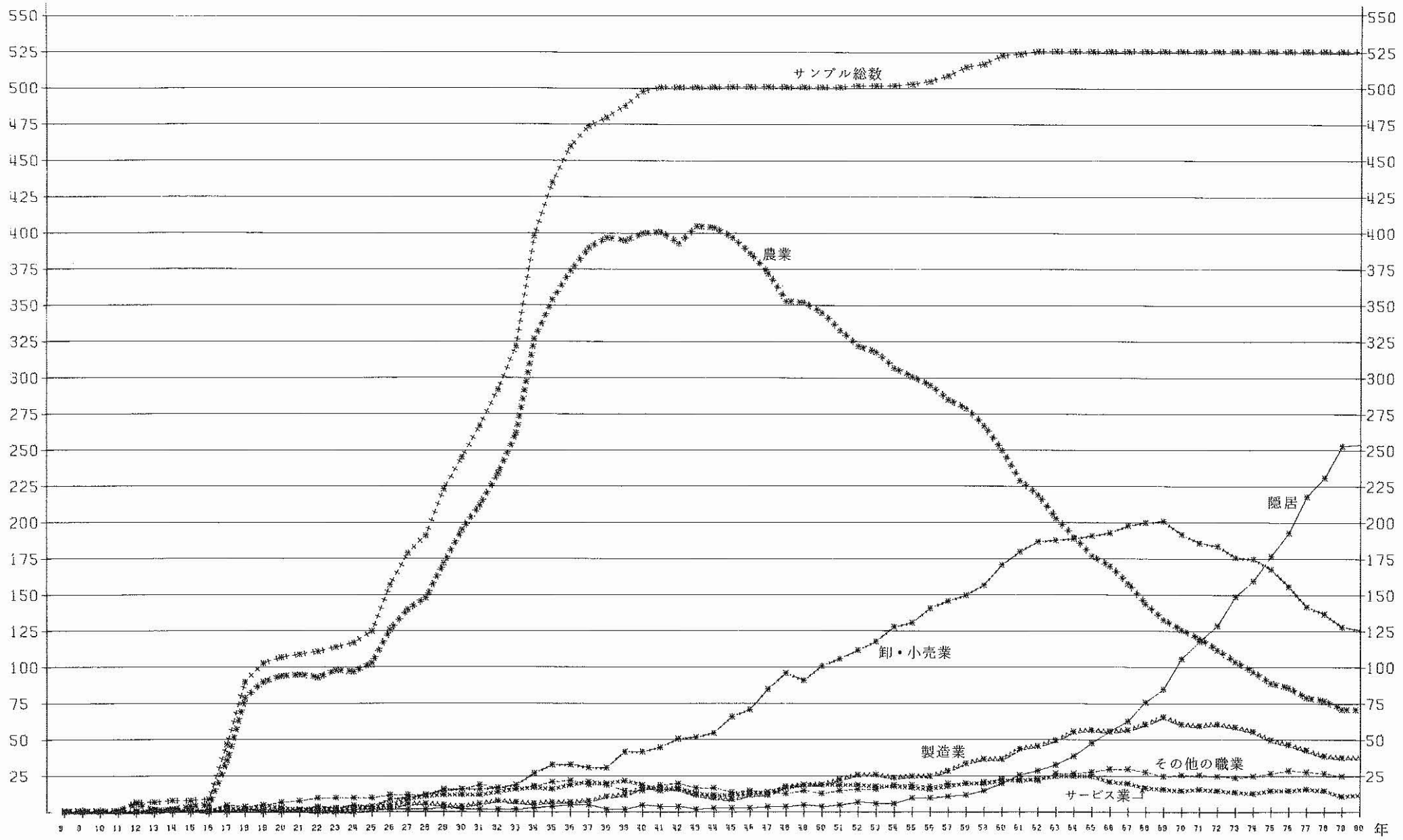
第1表は、産業大分類による職業のうち、農業、卸・小売業、製造業、サービス業、無職その他の職業への該当者を年次別累積に示したものである。その他の職業は林業、水産業、鉱業、建設業、金融・保険、不動産業、運輸・通信、その他を含む。

ブラジル調査のサンプル総数は527であるが、図表には526と出る場合があるのはアンケート調査で1部分において十分な聴取ができなかったことに起因しているが、分析・考察に大きな意味を与えていないと考える。

ブラジルにおける沖縄県出身移民の職業変遷を第1図で概観することからはじめると、それぞれの職業が時代とともに極めて興味ある変化を示していることが容易によみとれる。

Ⅲ　農　　業

最初に殆んどの移民が移民当初に従事した農業について考察を試みる。第1図に示されているように農業従事者累積数は初期移民から1943年まで総サンプル累積に対応して増大している。1941年は戦前移民の入国最終年であり、総サンプル累積も501人と戦前のシーリングを形成している



第1図　移民の主要職業該当者の年次別累積（1908 － 1980）

のに対し、農業従事者数は1943年をピークに減少の傾向を示している。この傾向は他の職業分野への進出が増大する時代と逆の趨勢をみせている。また、戦前移民が錦衣帰郷の期待を胸にいだき苦しい移民生活の末、やがて移民国での生活基盤をそれなりに築き経済活動を次の世代にまかせ開放される1960年代から農業従事者は急激に減少している。この農業従事者累積数を総サンプルの割合からその変動傾向をみると、初期大量移民のひとつのピークとなった1918～20年には農業従事者数は全体の88％にも達している。この傾向は戦前移民最後の大量移民を経験した昭和7～8年頃から大戦終了の1945年まで継続している。この傾向を少し詳しくみると、1940年代末まで70％を示し、1950年にいたると60％から50％へと減少し、1960年にはその比率は40％から30％へ、さらに20％台まで下降し、1969年にはその比率は25％を占めている。1970年代に入りその比率は20％台から10％台まで下落しており、1980年には全体のわずか14％を占める状態に至っている。

1　移民と農業生産物

移民が栽培・管理・飼育等にかかわった農業活動には、第2表に集約されているように米、コーヒー、棉花、サトウキビ、野菜、果樹（主にバナナ）、花卉、その他の作物（雑作）に加え、畜産の牧牛、養豚、養鶏等がある。これらのうちの主要栽培・管理作物を年次別に推移を示したのが第2図であり、顕著な作物はコーヒー、棉花、果樹、野菜、米である。

斎藤、中川[(2)]はブラジル経済史にサイクルの歴史がみられることを指摘している。それは、①ブラジル発見時代からのブラジルの国名が由来するパウ・ブラジルの時代、②ノルデステのサトウキビに基礎をおく砂糖生産の時代、③18世紀初頭から始まるミナス、ゼライス州を中心とするゴールドラッシュ時代、そして④19世紀から勃興をみせたコーヒーの時代によるサイクルである。さらに、これらに附随して、ドレイ輸入貿易、バイヤ

第２表　農業生産活動に従事した移民の年次別累積

（1908 ～ 1980）

活動／年	サンフル累積	農業活動従事者	米	コーヒー	棉花	サトウキビ	蔬菜	果樹	花卉	養鶏	牧畜	養蚕	養豚	その他の畜産	不明
1908 ～	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1909 ～	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1910 ～	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1911 ～	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1912 ～	7	6	0	5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1913 ～	7	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1914 ～	8	2	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1915 ～	8	4	1	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
1916 ～	9	5	0	1	0	2	1	0	0	0	1	0	0	0	0
1917 ～	47	36	1	30	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	2
1918 ～	90	79	11	62	2	1	1	0	0	0	1	0	0	0	1
1919 ～	103	90	26	51	2	2	5	0	0	0	1	1	0	0	2
1920 ～	107	94	32	44	3	3	5	1	0	3	0	1	0	0	2
1921 ～	109	95	34	40	5	3	6	1	0	5	0	1	0	0	0
1922 ～	111	93	32	43	5	2	7	1	0	2	0	1	0	0	0
1923 ～	114	98	32	40	6	2	12	1	1	3	0	1	0	0	0
1924 ～	117	97	25	42	12	1	11	1	1	2	0	1	0	0	1
1925 ～	125	103	30	35	18	2	9	3	1	3	0	1	0	0	1
1926 ～	157	126	46	40	12	5	15	4	0	2	0	1	0	0	1
1927 ～	179	140	53	44	13	4	18	6	0	2	0	0	0	0	0
1928 ～	191	148	52	53	12	2	22	6	0	1	0	0	0	0	0
1929 ～	223	172	58	56	11	3	28	9	0	5	0	0	0	0	2
1930 ～	245	195	60	64	16	3	36	10	0	3	0	0	0	0	3
1931 ～	267	212	62	66	20	2	43	13	0	3	0	0	0	0	3
1932 ～	292	234	66	66	27	2	48	17	0	4	1	0	0	0	3
1933 ～	322	262	71	66	47	2	45	24	0	4	0	0	0	0	3
1934 ～	398	327	91	73	66	2	51	30	0	9	0	0	0	0	5
1935 ～	435	355	81	78	87	0	53	36	0	12	0	0	1	1	6
1936 ～	460	375	69	86	101	0	55	42	0	15	0	0	1	0	6
1937 ～	474	390	69	74	126	0	56	46	0	14	0	0	1	0	4
1938 ～	480	397	74	60	140	0	58	46	0	14	0	0	1	0	4
1939 ～	488	395	64	61	140	0	61	52	0	13	0	0	1	0	3
1940 ～	498	400	60	60	137	1	64	57	0	13	0	0	1	0	7
1941 ～	501	401	60	55	134	1	69	59	0	16	0	0	1	0	6
1942 ～	501	394	58	53	128	0	69	60	0	18	0	0	1	0	7
1943 ～	501	405	57	58	136	0	58	63	0	23	1	0	2	0	7
1944 ～	501	404	50	59	127	0	61	65	0	30	2	0	2	0	8
1945 ～	501	397	43	53	119	0	75	73	0	21	2	0	2	1	8
1946 ～	501	386	40	53	104	0	78	73	0	23	2	0	3	3	7
1947 ～	501	372	35	51	90	0	88	74	0	21	2	0	3	0	8
1948 ～	501	353	34	50	73	0	93	69	0	21	2	0	4	0	7
1949 ～	501	352	35	50	71	0	95	69	0	19	2	0	4	0	7
1950 ～	501	345	33	51	65	0	95	71	0	20	1	0	3	0	6
1951 ～	501	333	25	50	56	0	103	69	0	21	0	0	3	0	6
1952 ～	502	322	25	47	51	0	104	66	0	22	0	0	2	0	5
1953 ～	502	318	23	53	43	0	103	66	0	22	0	0	3	0	5
1954 ～	502	307	22	50	37	0	105	66	0	20	0	0	2	0	5
1955 ～	503	301	22	49	32	0	107	64	0	21	0	0	2	0	4
1956 ～	505	295	18	48	30	0	108	62	0	23	0	1	2	0	3

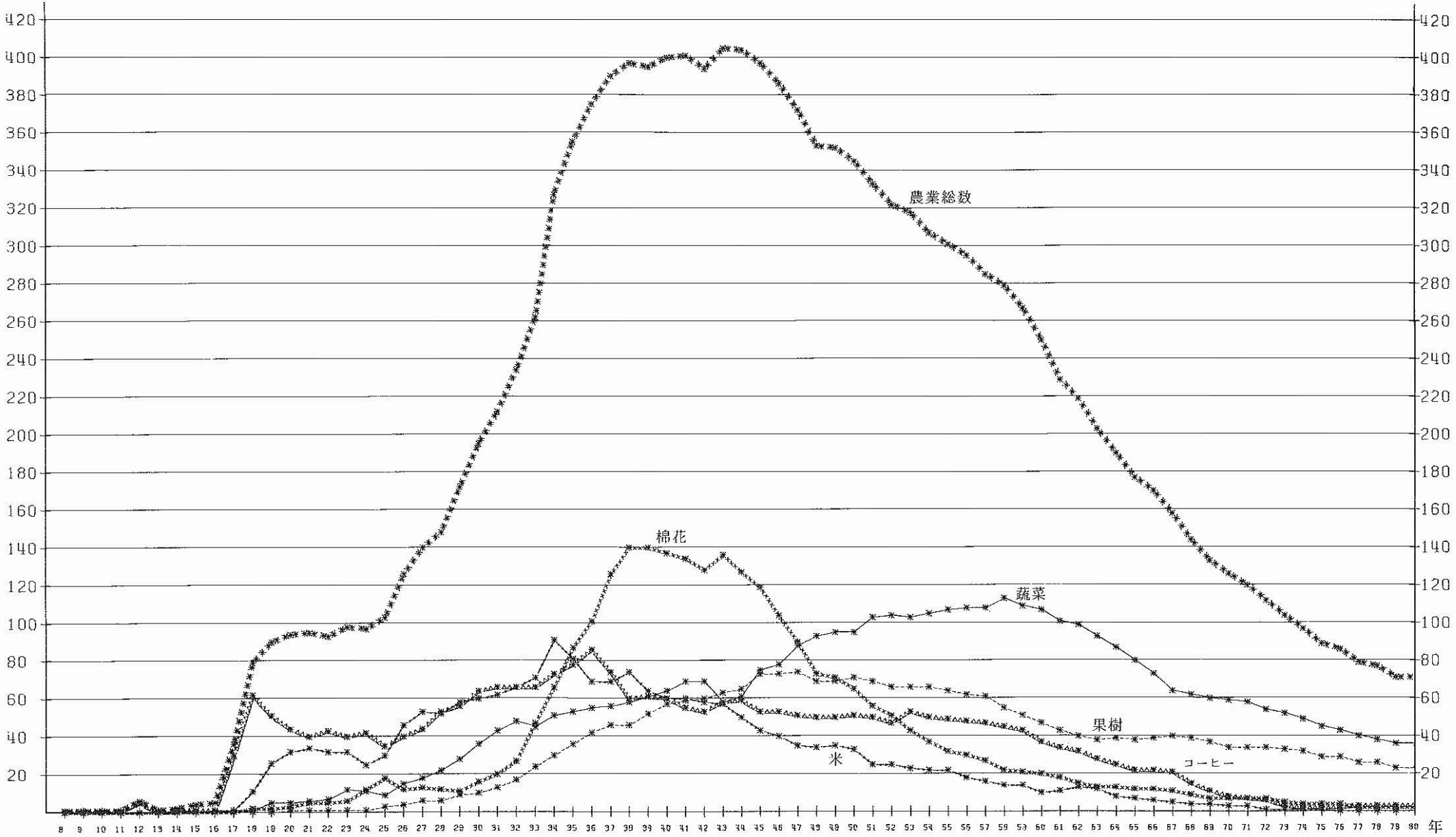
活動 / 年	サンプル累積	農業活動該当者	米	コーヒー	棉花	サトウキビ	蔬菜	果樹	花キ	雑作	牧生	養豚	養鶏	その他の畜産	不明
1957 ネン	509	285	16	47	27	0	108	61	0	20	0	1	2	0	3
1958 ネン	515	279	14	45	22	0	113	55	0	24	0	1	2	0	3
1959 ネン	517	267	14	43	21	0	109	51	0	24	0	0	2	0	3
1960 ネン	523	250	10	37	20	0	107	47	0	23	1	0	2	0	3
1961 ネン	524	229	11	34	18	0	101	43	0	16	1	0	3	0	2
1962 ネン	526	219	13	32	15	0	99	40	0	14	1	0	3	0	2
1963 ネン	526	203	12	28	13	0	93	38	0	15	1	0	2	0	1
1964 ネン	526	190	8	25	13	0	87	39	0	13	1	0	3	0	1
1965 ネン	526	177	7	22	12	0	80	38	0	12	2	0	3	0	1
1966 ネン	526	170	6	22	12	0	73	39	0	12	2	0	3	0	1
1967 ネン	526	158	5	21	11	0	64	40	0	11	2	0	3	0	1
1968 ネン	526	144	4	15	9	0	62	39	0	9	2	0	3	0	1
1969 ネン	526	133	4	11	7	0	60	37	0	8	2	0	3	0	1
1970 ネン	526	126	3	8	7	0	59	34	0	9	2	0	3	0	1
1971 ネン	526	120	3	7	7	0	58	34	0	6	2	0	3	0	0
1972 ネン	526	112	1	6	7	0	54	34	0	5	2	0	3	0	0
1973 ネン	526	104	1	3	5	1	52	33	0	4	2	0	3	0	0
1974 ネン	526	97	1	2	4	1	49	32	0	4	1	0	3	0	0
1975 ネン	526	89	1	2	4	1	45	29	0	3	2	0	2	0	0
1976 ネン	526	86	0	2	4	1	43	29	0	3	2	0	2	0	0
1977 ネン	526	79	0	3	2	1	40	26	0	3	2	0	2	0	0
1978 ネン	526	77	0	3	2	1	38	26	0	3	2	0	2	0	0
1979 ネン	526	71	0	3	2	1	36	23	0	3	2	0	1	0	0
1980 ネン	526	71	0	3	2	1	36	23	0	3	2	0	1	0	0

地方を中心とするタバコ、棉花栽培が砂糖生産に伴って副サイクルとして展開をみせ、しかも、各サイクルはパウ・ブラジルを除いてほぼ100年の間隔で生起している。

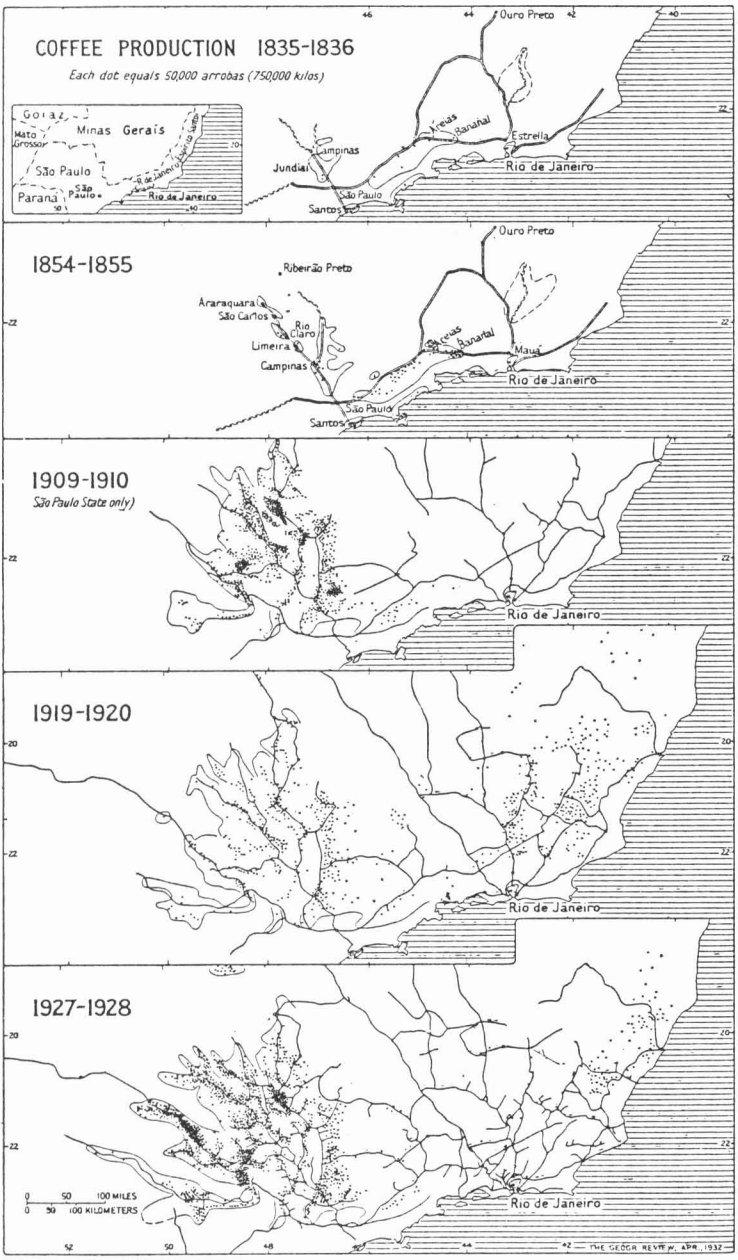
(1) コーヒー（café）

コーヒー生産にかかわった移民は笠戸丸移民から現在に至って出現するが、特に初期移民はファゼンダにおけるコーヒー生産活動に従事した者がその大半を占めたことは容易に推測される。コーヒー生産活動に従事した移民の年次別累積をみると1917年から増加し、翌年の1918年にはひとつのピーク（62人）を形成し、その後漸減から漸増の傾向を経て1935年に第2のピークを示している。その後1939年から1950年まで停滞状態を経て1960年代には漸減し1970年代に至り急減している（第2表及び第2図参照）。この傾向は後述する棉花の傾向と比較するとその変化は著

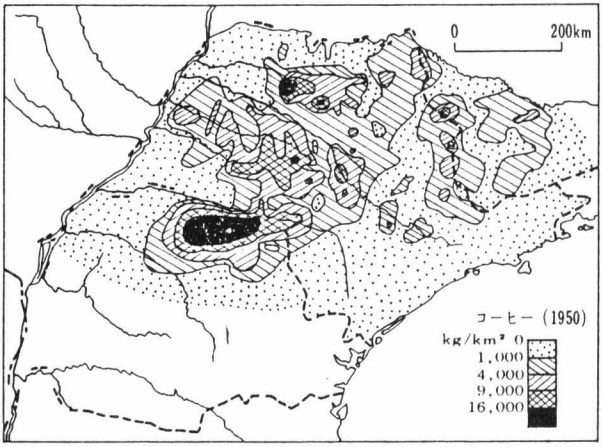
しくないことは、コーヒーがサンパウロ州のファゼンダにおける最も重要な作物としての地位を長年にわたって維持してきたことを意味する。コーヒー生産地はその初期（18世紀）にはリオジャネイロ州から東漸し19世紀にはサンパウロ州に拡大し、特に20世紀初頭からサンパウロ州がその中心としての地位を得た。コーヒー生産は国際市場、自然災害等の影響を受けつつもサンパウロ州はその地位を長年にわたって堅持した。1850年代にカンピーナスを中心にコーヒーの適作土壌弱アルカリ性のテラロッシャの分布地帯を選択的に開拓が進行し、この土壌の分布地帯を追いコーヒー生産の開拓前線はモジアナ鉄道線の延長と平行して北部へ拡大した。20世紀初頭においてはアララクアラ・リベロンプレットまで生産地帯が及び1920年代には北西部へと拡大をみせている。このようにサンパウロ州におけるコーヒー生産の地域的変遷は第3図に示すようにそれぞれの生産地の分布は鉄道網の分布と極めて密接な関連がみられる。北西部から西部までコーヒー生産が行われた地域の土壌はテラロッシャでもコーヒー生産に最適な性質を具備していない場合がみられた。どちらかといえばコーヒー況気の趨勢にまかせ、やや不適な土壌まで使用し生産地域が拡大した。国際経済の動向とのかかわりをみると、1929年の大恐慌の影響の直撃を受けサンパウロ州のコーヒー生産は全体的に大きな転換をむかえる。コーヒーは土壌疲幣の著しいサンパウロ州の西部から南進して隣州のパラナ州へとその適地を求めて移動したのが1930年代初期であった。やがてパラナ州北西部の良質なテラロッシャ地帯においてコーヒー生産が隆盛を極める。第4図にみられるように1950年代に入りパラナ州のコーヒー生産はサンパウロ州を凌駕しつつあり、ついに1958年に至りサンパウロ州はブラジルにおけるコーヒー生産の首座をバラナ州に譲った。さらに、1962年には、パラナ州のコーヒー生産はサンパウロ州の2倍の伸長をみており、以後同州はコーヒー州としての地位を保持している。このコーヒー地帯においてかつての開拓村落から発展した都市が現在コーヒー生産の中心地に位置するロンドリーナである。このようにコーヒー生産地が土壌疲幣に伴



第２図　移民の主要作物栽培・管理の年次別累積（1908 ～ 1980）



第3図　コーヒー生産の地域変遷（James, P. E: P. 485）



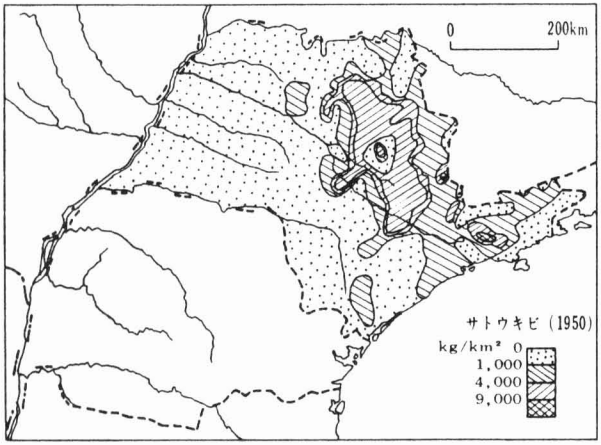
第4図　1950年当時のコーヒー栽培地域、南進し、パラナ州にも移動している（高木秀樹：P. 165）

い新しい土地を求めてその生産地が常に移動していることはコーヒーがプランテーション作物として典型的な形態を示していることを意味する。同時に、コーヒー生産に従事する労働者あるいは生産者もこのような空間移動を行っていることが理解できよう。

ブラジルにおける沖縄県出身移民も初期から契約移民として移民した者はコーヒーファゼンダに入耕した。明治41年（1908）の笠戸丸による第1回移民の168家族（791人）中、沖縄県から50家族の324人（274人、女50人）は全国で最も多い。[3] これら移民は殆んどがモジアナ沿線沿いのコーヒーファゼンダに配耕されており、沖縄県出身移民はサンパウロ市北95キロほどに位置するフロレス耕地（ファゼンダ）とモジアナ線のひとつの拠点であるリベロンプレット附近のカナアーン耕地の二つのファゼンダに配耕されている。その後、大正期中期、昭和7～8年に大量に移民が到来し、コーヒーファゼンダの移動に伴って移民がコーヒー生産に従事した。

(2) サトウキビ（cana de açucar）

サンパウロ州においてコーヒー農場が移動したあとに導入されたプランテーション作物は、サトウキビと棉花であった。現在のサトウキビ生産の中心地は、モジアナ線のリベロンプレットからアララクアラ鉄道線のアララクアラにまたがる地域である（第５図）。



第５図　1950年当時のサトウキビ栽培地域、かつてのコーヒー地域（高木秀樹：P. 165）

サトウキビは他にブラジル伝統のサトウキビプランテーションのウジーナが発達したブラジル北東部の海岸一帯やエスピリトサント州において広く栽培されて来たが、石油危機以来その栽培は他の地域へ拡大すると共に従来の栽培地域においても生産は急増をみせている。ちなみに最近のＦＡＯ統計によるとブラジルのサトウキビ生産はインドに続いて世界第２位（1979年）である。

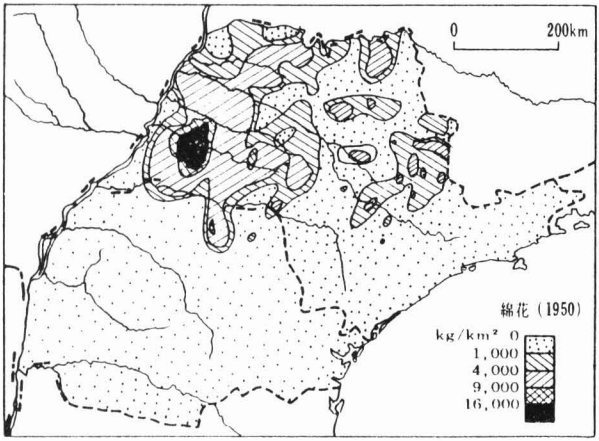
第２表をみると、沖縄県出身移民のサンプルの中でサトウキビ生産に従事した数は極めて少ない。もっとも、初期移民の中にサトウキビ生産にかかわった者が出現するが、このことは彼等がウジーナで労働に従事したこ

とは言明しがたい。なぜなら、特に初期から大正時代までの移民でファゼンダに入耕した移民はコーヒー生産に従事したのであって、他方、古くから県出身移民集中地であるジュキア線地方と南マットグロッソ州のカンポグランデにおいて既にサトウキビ生産が行われていた。サンプル中のサトウキビ生産従事者の大半は小農園における形態である。

(3) 棉花（algodão）

イギリスの繊維工業の発達に刺激を受け急速に伸びた綿花栽培は、かつての中心地である東北部から南部へ移動している。サンパウロ州においてはコーヒーのあとに導入された作物である。現在ブラジルにおける主要棉花生産地は東北部とサンパウロ州、パラナ州である。サトウキビが意外にも県出身移民とのかかわりが稀薄であるのに対し、棉花は彼等にとって極めてなじみ深い作物である。第2表と第2図によって移民と棉花生産の関係のプロセスをみると、1920年代から棉花従事者が出現していることから、当時から既に棉花がプランテーション作物としてサンパウロ州の奥地（intenior）に導入されていたことがうかがえる。県出身移民の棉花生産への従事者数は1930年代に入り急増し、30年代末期にピークを迎えかつ従事者数はいずれの作物よりも多い。これはサンパウロ州において1930年代に入り棉花況気となったことと一致した傾向である。その後数年間の安定した状態が続き、大戦終焉の頃から漸減の傾向を示している。サンパウロ州における棉花栽培地域の空間的変遷は州の北部の奥地へと展開していることが第6図からうかがうことができる。

サンパウロ州を中心にプランテーション作物の空間的サクセッションを概観すると戦前移民はプランテーション作物の移動と共に空間移動し、あるいは作物のサクセッションに平行して異ったプランテーション作物の生産に従事するという移民生活を体験している。



第6図　1950年当時の棉花栽培地域、コーヒー地域のあとに導入（高木秀樹：P. 164）

(4) 米（arroz）

もともとポルトガル植民者によって導入され栽培されたであろう米（arroz）の生産は日系移民によって各地で広く行われてきた。サンパウロ州とその周辺州、そしてカンポグランデ市周辺での米作はその大半が、陸稲である。しかし最近、サンパウロ州の南海岸低地帯において水田による米作がみられる。1980年の現地調査の際にわずかながら県出身二世の水田耕作をレジストロ市に近い河岸の低地帯で確認する機会を得た。また、ここでは日政援助によるヒベイラ川流域開発センターの水田開発の状況も観ることができた。一方、ブラジル南部のリオグランデ・ド・スル州においてはかつての陸稲栽培が近年に至りその殆んどが水稲栽培に変化している。

米栽培はフローレスやカナアーン耕地を脱耕あるいは契約完了した県出身移民がサントスから海岸山脈の海岸線―山間を走る南サンパウロ鉄道

（通称ジュキア線）の敷設工事で工夫として働き、やがて山地部における鉄道工事にさしかかると彼等は自立して山間部で米作を開始した。大正初年のことでこれが日系移民による米作のはじまりである。その後、ジュキア線が延長されるに伴ないこの地方に県出身移民を中心に米作が広く栽培されるようになった。

移民は、他方では南マットグロッソ州のカンポグランデの諸農場において米作に早くから従事しており、各地方のファゼンダ・植民地においても間作あるいは雑作として広く米作を行っていた。第2表及び第2図においてみると米生産従事者は1914年（大正4年）から出現しており、特に1918年頃から増加をみせ、1934年には農作物中最も多くの移民が米作にかかわっている。昭和2年にジュキア線で当時県出身移民の集団地のひとつイタリリーに入植した花城清安[4]は当時の農業景観を“ほとんどが単一の米づくり”と評している。のちほど、詳述するが、1933年のジュキア線地方における日系移民の職業をみると、農業が全体の92％を占め、農業従事者の76％が米栽培にかかわっていた。その後、わずかな変動を示しつつ日伯両国が第二次大戦のため国交が中断し、一部地域における日系移民の強制立退き命令が出た1943年頃からその数は漸減の傾向をみせている。戦後もジュキアや各地方における米作従事者は幾分みられるが、1960年代に至りその相対地位は低く、現在においては皆無となっている。しかし、農村地域、カンポグランデ等では現在においても主要作物あるいは雑作として栽培が行われている。米作中心地であったジュキア地方ではかつての米作地は牧場あるいはバナナ栽培等の土地利用へと大きく変貌している。

(5) 果樹（frutas）

果樹生産も県出身移民とはなじみの深いものであり、ブラジルで豊富に生産される果樹のなかで県出身移民とかかわりのあるのは、バナナ（bana-

na)、オレンジ（ralanja)、ブドウ（uva)、パイナップル（abacaxi）等が挙げれるが、就中、特筆すべきはバナナ生産である。従来、バナナはプランテーション作物として、かの有名なUnited Fruites Company がレジストロのヒベライ谷底（Vale do Hibeira）に導入した作物であるといわれているが、現在バナナは主に東北部・エスピリトサント州、リオデジャネイロ州、サンパウロ州の沿岸地帯において生産が行われており、サンパウロ州では、いわゆるジュキア地方とその南部のレジストロー帯において集中的な生産がみられる。第2表及び第2図における果樹についてはその大半がバナナ生産についての統計である。バナナ生産従事者は、1920年から出現しているが、1929年のコーヒー不況のためコーヒー生産地にいた移民のジュキア線地方への流入も加えバナナ栽培が盛んになりだし、生産従事者も漸増をたどり、第二次大戦終焉頃にそのピークを示している。

ちなみにジュキア線一帯における1933年のバナナ栽培状況を各駅別にみると、次の通りである（第3表 Ⓓ)。

第3表　ジュキア線（イタニヤエン～ジュキア）の日系移民

Ⓐ　**移の職業（1933年）**

	職業	人数		職業	人数
1	農業	653	12	裁縫業	2
2	雑貨店	16	13	飲食店	2
3	教員	6	14	洗濯業	1
4	店員	5	15	雑穀商	1
5	ピンガ酒造	5	16	薬局	1
6	理髪業	4	17	菓子商	1
7	支配人	3	18	周旋業	1
8	仲買人	3	19	事務員	1
9	旅館	2	20	運搬業	1
10	鍛冶屋	2	21	職工	1
11	大工	2	計		713

Ⓑ　農業における地位

自　営	129 人
借　地	495 人
請　負	2 人
農　労	22 人

Ⓒ　農産物別生産者数

米	459	バナナ	106	木　炭	34
ま　ゆ	6	野　菜	4	ミリヨ	3
甘　蔗	3	甘　薯	3	コーヒー	3

（伯剌西爾年鑑 1933 年, pp.48 ～ 60 から集計）

Ⓓ　バナナ栽培

駅　名	株　数
イタニャエン	40,000
ペルイーベ	–
アナ・ディアス	82,500
ラポーゾ・タバレス	–
イタリリー	112,700
アレクリン（現在ペードロ・デ・トレード）	195,500
イベラー	–
マノエル・ノブレガ	19,500
ペードロ・バーロス	172,300
ミラカツ	37,600
ビグアー	127,600
セードロ	243,800
ジュキア	21,700
計	1,053,200

（当時は株植えであったが現在では 1 本たてであるので「本」で数えている。）

（半田知雄： 1970, p. 338）

なお、同年同地域の日系移民で農業従事者の 16 % がバナナ栽培を行っており、当時としてはまだ米作中心の地域であった。バナナプランテーショ

ン発祥の地であるジュキア線の南に隣接するレジストロー帯は当時から既に日系移民の殆んどがバナナ生産に従事していた。

バナナ栽培は大戦後においてもその生産はしばらく安定した状態を維持し、戦前移民が隠居する時代に到来している今日においても農村地域における生産活動としては最も顕著な分野である。沖縄県出身移民が初期入植より集中し彼等によって開拓されたジュキア線地方は、かつて米作とバナナ栽培がオーバーラップして行れたが現在では米作は殆んど消えバナナ栽培地域と変貌している。なおレジストロのヒベイラ底谷地域は広大なバナナ園が展開し、県人の活躍はこの地域にも及んでいる。

(6) シャーカラ：蔬菜（Verduras）

人口集中地である駅を中核とする地方都市、サントス市、サンパウロ市、カンポグランデ市等の都市周辺において移民が近郊農業に従事したのは極めて古い時代までさかのぼる。第1回移民がファゼンダから脱耕しあるいは契約満期となりサントス市に多数流入している、彼等の一部は0.5 ha の土地を借地して蔬菜栽培とその生産物の販売を行っている。

1933年のサントス市在住日系人職業構成からみると、既に多様化した諸職業に従事する移民の多いなかで、全体の50％が農業に従事し、かつその99％の者が野菜栽培を行っていた。サンプル中1916年には既に蔬菜栽培をこのような小規模農園シャーカラ（chacara）で経営している。このシャーカラ経営は1920年代の後半から増加傾向を示している。このことは移民がファゼンダ・植民から離れ都市周辺に移動したことを意味する。また農業活動の最終段階における一形態ともいえる。第2図からシャーカラ経営の動きをみると、1942年までその累積数は漸増をたどり、1943年～1944年は谷間を形成しているのは1943年に日系移民立退命令によりサントス市とその周辺から他地域へ強制移動があったことに原因している。しかし、1945年以降はかなり顕著に増加傾向をみせ、1949年から他の

いずれの農業活動従事者より多くなり、1959年にピーク形成している。その後は漸減し1960年代後半からその減少は顕著な傾向を示している。
シャーカラ経営は、前述の通り移民の農村地域より都市あるいは近郊への移動に伴う新しい農業形態といえる。またシャーカラ経営は後述するフェイラと密接な関係をもっている。

(7) その他の作物（雑作）

戦前移民が各地のファゼンダ、植民において上述の諸作物の生産にかかわったが他に数種の作目にも関係している、1940年頃から、1945年頃までの短期間であるがサンパウロ州奥地のソロカバナ線に沿ってハッカ況気がみられ多くの県出身移民もこの作物に誘因されプレシデンテ・ブルデンテを中心にハッカ栽培を行っている。しかしこの生産は、大戦中のことであり、日系人社会における太平洋戦争にまつわる混乱とハッカ不況気のためその生産は短期間で終末を迎えている。

移民の農業活動に関してこれまで具体的な作物とのかかわりを考察してきたが、現地調査の結果分離困難な作目組合せの生産活動が行われたことが判明した。多くの場合、ある種の作物を単一あるいは、副時的に第二の作物に加え自給用の栽培・畜産を伴う生産が一般的形態であったが、複数の作物と同時に生産するいわゆる「雑作」の形態がある。雑作農は1920年から出現するが、1930年代中期から増加し、その後わずかの変動がみられるが多い場合でも農業活動従事者全体のわずか1％（1944年）であった（第2表）。しかし、雑作農数はその後1960年代後半まで明確な変動を示さなかった。雑作形態の内容をみると、作目の組合せは時代とともに変化している。第2次大戦前においては、米、フェイジョン（豆類）、マンジョウカ、トウモロコシ、棉花、玉葱、ジャガイモなどが生産され、その大半はブラジルの国内消費作目であった。大戦後は、前述の作目に加え、1950年代に落花生、1960年代に大豆が導入されている。なお、ブ

ラジルに北部、北西部の遠隔地に最初に入植し移民の中にはゴム・カカオなどの熱帯農業活動に従事した者がいる。
に従事した者がいる。

(8) 牧牛（gada bovino）

初期移民の牧牛とのかかわりは牧場で働き、牛の世話をした者であり、1940年代に至り、牧場経営をした場合がみられる。現在でもわずかながら牧牛生産が存するが、ファゼンダ規模の牧牛経営者はサンプル中に出現しなかった。現在は、二世の時代に至っており数は少ないがその例はカンポグランデ市などにおいてみられた。

(9) 養豚・養鶏（criacão de suinos e avicultura）

サンプル中に養豚業に従事した移民が極めて少ないのは意外に思えるが、しかし、初期から県出身移民は各耕地で自家用の養豚を行っていたことは調査において判明したように広く知られている事実である。養鶏は1930年代後半からみられるがそのウェイトは顕著でない。それも地方都市においてみれる形態である。なお、移民はファゼンダ、植民地など農業地域で生活した時代には、養豚と同様自給用の養鶏を行っていた。

(10) 林業活動（extrativismo vegetal）

移民の第一次産業従事分野の殆んどが農業の分野であるがサンプル数は特に多くないが初期移民時代から林業とのかかわりがみられる。この分野への従事者はサンプルにおいて1914年から出現し、1959年には消えている。初期においては、契約耕地から解放されると鉄道工夫になる者がある一方枕木出しに従事した者がいる。ジュキア線地方では炭焼きをした移民

が目立った、1933年に同地方の農業部門でバナナについで木炭生産従事者が多かった。化石燃料生産の乏しいブラジルでは家庭用・窯業用燃料としてかなり需要があったことが推測される。このことは第4表にみられるようにそれ相当数の日系移民が木炭生産を行っていたことからもうかがえる。

第4表　サンパウロ州における日系移民による農業生産（1923年）

生産物	数量（トン）	金額（コント）※
棉花	12,962	19,271
米	33,494	17,448
コーヒー	9,926	14,308
豆類	5,138	5,196
ジャガイモ	7,500	3,750
トウモロコシ	8,848	2,390
サトウキビ	53,000	795
木炭	7,783	519
砂糖	279	186
ピンガ酒	77,725（リットル）	155
その他		141
合計		64,159
		（S 5. 697,319 U. S.）

※ブラジルがポルトガルから継承した通貨単位はミル・レイス（RS. 1 $ 000）である（1,000ミル・レイスが1コント・デ・レイス）。これは、1942年10月5日の法令第7491号によって同価値のクルゼイロに切り換えられ現在に至っている。

（Tsuchida: 1978, P. 206）

他に、移民の中には、農業活動の途中、耕地、牧場開発等の目的でファゼンダ主などと契約により荒山（山林）の伐採を請負いで行った。

これまで、ブラジルにおける県出身移民と農業生産活動、特に作物とのかかわりについて時系列的、空間的考察を試みた。ここで、戦前の全日系移民の農業生産諸活動をサンパウロ州における地位と県出身移民サンプルのそれらとの比較考察をしたい。Tsuchida の研究によると、1923年サ

ンパウロ州の日系移民6,668農場（sitio）における農業生産を生産品とその金額からみると、棉花、米、コーヒー、豆類、ジャガイモ、トウモロコシ、サトウキビ、木炭、砂糖、ピンガ酒、その他の順位となっている（第4表）。県出身移民の自営農場でどれほど生産がなされたかについての統計は得られないので単純かつ直截的な比較は妥当でない。しかし、当時の県出身移民は第2表によると米、コーヒー、棉花、サトウキビ、蔬菜、果樹、その他の作物、養豚などの農業生産に従事している。さらに、Tsuchida は、県出身移民の中で農業従事者数がピークに到達する頃の1939年の全日系移民とサンパウロ州全体の農業生産比率から当時の日系移民の農業活動状況とその重要性に関して極めて興味深い分析を行っている。当時、日系移民はサンパウロ州人口のわずか1.8％、また耕地の4.9％を占めるに過ぎなかったが、州農業総生産額の20.4％は日系移民によって占められていた。その内容を同様の比率でみると、棉花（43.5％）、コーヒー（4.9％）、米（10.9％）、ジャガイモ（56.3％）、その他（9.8％）となっており、近郊農業生産におけるジャガイモに加え、蔬菜生産等において日系移民が既に重要な生産者としての地位を確立していたことがうかがえる。棉花は1924年から日系移民間で広く栽培されていたが1939年において金額では最強の農産物であった。また国内消費用の米、トウモロコシの生産もかなり高かったことがうかがえる（第5表）。一方、この年の県出身移民の農業活動を年次別累積にみると、蔬菜栽培は別として、全体的にほとんどの分野において生産活動が明瞭に出現しており、前述の全日系移民のいくつかの農業生産品目と対応しているが、ある種の品目ではその分類上対応しないものもある。このことは全日系移民のサンパウロ州における空間分布と専問生業と県出身移民のそれらがすんなりと対応しないことに原因していると考えられる。県出身移民はある特定地域に集団化していたこともその一因であると考えられるからである。またこのことが彼等の農業生産活動の専問化に影響を与えたと考えられる。たとえば、1939年において対応がみられるのは、棉花、米、雑作のトウモロコシが挙げられる。しかし、ジャガ

イモは必ずしもこの範疇で対応させるには充分な調査資料が存在しない。対応しない品目としてバナナに代表される果樹が挙げられる。第4表にはその項目がないのは日系移民全般では重要な作目でなかったためであろう。しかし、ジュキア線地方とヒベイラ谷底地域でかなりの日系移民がバナナ生産に従事した事実は留意しておく必要がある。

第5表　日系移民及びサンパウロ州の農業生産（1939年）

作物	州総生産	日系移民による生産	州総生産に対する割合
棉花	1,168,659	505,583	43.3 %
コーヒー	1,150,482	56,000	4.9 %
米	257,400	28,000	10.9 %
ジャガイモ	48,000	27,000	56.3 %
トウモロコシ	277,200	14,000	5.1 %
その他	346,741	32,165	9.8 %
計	3,248,610	662,748	20.4 %

（Tsuchida: 1978, P. 307）

2　移民と職業の地位

これまで戦前移民が農業活動でどのような作物・家畜とかかわって働いてきたかを中心に考察したが、移民がそれぞれの分野でどのような立場、地位で就業したであろうか。移民はブラジルに到養すると同時に何らかの職業に従事するが、そのほとんどが、資本、特殊技術、技能を具備していなかった。戦前日系移民の85％が農村出身であり、多くの移民はファゼンダ、植民地で農業活動に従事したことは当然の手続でありなりゆきでもあった。以上のことをふまえここでは彼等が農業活動に従事する過程で雇用労働から最終的に独立自営農あるいは他産業分野での独立経営へとたどっていることに視点をおき、そのプロセスを今回は特に農業分野に限って

考察することにする。

既報の「研究報告書」の調査収計表「表10－1：渡航形態」によると、ブラジルのサンプル総数中、57.9％が契約移民で41.1％が自由移民であった。ブラジルの契約移民の割合は、調査3ケ国で顕著な値であり、ペルー・アルゼンチンと大きく相異した形態である。一方、調査中に判明したことであるが、契約移民のなかで、サントス港到着後、移民会社、サンパウロ州政府などと合意の上契約耕地に行かず、親戚、友人、同郷人などを頼ってなかば自由移民の形態をとって呼寄地に行った者があった。このような移民形態を「準契約移民」と分類したが、この準契約移民は契約移民の36％を占めている。

第7図は、移民の主要職業の地位の年次別累積を図化したものである。農業活動分野のなかで、コロノ、カマラーダ、請負などの賃金労働者から考察をはじめてみることにする。その前にファゼンダにおける労働形態について説明を加えたい。

初期移民の大半はファゼンダあるいは植民地において農業諸活動にかかわっている。大正中期・昭和7～8年の、大量移民時期においてこの傾向は特に顕著であり、コーヒー樹の管理・収穫等に従事したコーヒーファゼンダの農場労働者が多い。いわゆるコロノ労働者に代表される賃金労働者である。コーヒー生産にたずさわる雇用労働形態は、その契約の相異によって一般に次の四つに分類される。すなわち、コロノ（colono）、カマラーダ（camarada）、パルセイロ（parseilo）、エンプレテイロ（empreteiro）の四形態で、雇主と労働者との契約によってこれら四つのいずれかに決まる。[5] 契約移民はサントス港に上陸すると間もなくサンパウロ州のいずれかのコーヒーファゼンダに詳細説明も受けず配耕され厳しいコロノ労働者・カマラーダとしての就業を余儀なくされたのが一般の経偉であった。

ここでコロノ労働者について説明しておきたい。大野、宮崎[6]によれば、この労働形態はコーヒー生産において特に典型的に発達したものであり、契約は1農年を単位としている。コーヒーは収穫期を除いて年間継続的管

理（とくに草取りと施肥）を必要とするが、コロノは1年間、契約したコーヒー本数を受持って管理し、これに対し賃金は本数に比例して年間いくらという契約によって現金で支払われる。この1年の継続的な管理に対して、収穫量に比例した出来高払賃金が支払われる。したがってコロノの賃金は一応、固定給＋出来高払賃といえよう。現地において移民からアンケート調査を行った際、コロノ労働者生活について強烈な生々しい実態について移民はかつての生活をこと詳細に述懐していた。ブラジルに長期滞在し現地研究の結果、前山[(7)]はコロノ労働者について次のように説明している。

> 移民の言葉に「一農年」というのがある。これはポルトガル語からの直訳であるが、耕地労働者の生活に直し、よく移民の≪コロニヤ語≫として定着したものである。日本移民の理解からいえば、一農年には一定の時間的長さはない。が、一定の終りの時期があり、それは生活のリズムが変り、けじめのつく時期である。それは9月に収穫が済み、採集開始の時≪山立て≫（コーヒー採集には実を一旦地面にしごき落とすので、採集前に樹の下を掃除し、ごみや柔かい土を樹々の中間に山盛りする作業）で盛った土を散らす≪山崩し≫をもってその整理がつき、一年間の賃金と借金の総決算をした時である。その時は同時に、他に移動するか、残留して再契約をするか、将来の生活設計と出稼ぎストラテジーとに照らしあわせて肚を定める時でもある。しかし、一農年にはふつう一定の始まりというものはない。契約労働者は主として外国移民で、契約は一農年単位で行われるが、移民の到着する日が毎年一定しているわけではない。採取期の初めに到着するのが望ましいが、いつもそうはいかない。コーヒー耕地の労働は主として収穫と樹の管理（主に草取り）とに二分される。一農年は、耕地労働者にとって、採取期（5カ月もつづく）の或る時に始まり（到着して準備が整えば労働が始まる）、収穫を済まし、樹の管理の時期を経て、つぎの採取期をフル・コースで働き終えれば、完結するのである。

≪コロノ≫という言葉がある。これはラテン・アメリカに広く行われる概念で、元々は移住者(コロニスト)を意味するが、ドレイ制とその廃止との関連で各地で特殊な発達をした制度で、地域により大へん内容を異にしている。ブラジルのコーヒープランテーションの地帯では、賃金労働者の一形態で、強制労働者であったドレイに対するひとつの概念である。一般には、コーヒー耕地における契約労働者をいう。簡単にいえば、まずコロノは家族単位で契約され、個人単位ではない。採取期には、採取したコーヒーの量により能率給で支払われる。これには女も子供も皆総出で参加し、採取の総量に対して、たとえば月単位で支払われる。樹の管理は千本単位一年間の管理費が定められ、体力、希望、家族の大きさなどに従って分担本数が定められ、年間の賃金が決定される。支払いは月ごとであったり、隔月であったりその他色々である。樹の管理、草取りは毎月よく監督され、仕事開始、仕事仕舞いの時間が一定している。つまり自由に時間のコントロールはできない。明確な理由なしに出勤しないと、すぐ狩り出される。草取りが遅滞すると、他のコロノたちに日当を支払って草を取らせ、その費用は賃金から差し引かれる。住居は無料で提供される。

この他に、色々な附帯的な条件があるのがふつうである。耕地の命令あるいは要請にしたがって上記以外の雑用、道路工事、牧場の仕事などに出ると、別に一定の日当が支払われる。日曜、祝祭日は休みであるが、この時を利用して主として自家消費用の農作物をつくることがふつう認められる。コーヒーの若樹の樹間に植えることを許される場合を日本移民は≪間作≫と呼び、有閑地を利用させてもらう場合は≪余作地≫あるいは≪外作地≫という言葉をあてている。共に日本移民の造語であろう。これらはふつう借地料はとらない。間作、余作地の収穫物を売却してかなりの収益をあげることもできた。これは耕地のコントロール外にあるのが一般であるが、外部の商人に売る方法が閉されている場合もある。同様に豚や鶏を飼うこともでき、自家消費

をはるかに越えて、それで収益をあげることができる。これらは二次的な条件であり、耕地により大きく相異している。

リーン・スミス[8]はサンパウロ農務局より公刊された小冊子（それは雇い口を探しにサンパウロ州へゆこうともくろんでいるひとびとの案内のためのものである）による定義を引用している。

コロノとは、一年契約で、一定数のコーヒーの木や一定面積の棉花や、甘蔗、オレンジ類、米、豆類といった他の作物の管理と責任収穫とに従事する義務を負う労働者である。…コロノとして契約するうえでの優先権は、合意に達した役務を助けうる者少なくとも三人（妻、子供或いは12歳以上のアグレガード：付属労働者）を含んでいる家族の長に与えられる。

上記の定義に明記されているように、南米への沖縄県出身移民中で、ブラジル移民の契約移民に12歳以上の子女を含む『つくり家族』あるいは『構成家族』が目立って多いことが理解できよう。なお構成家族については既報の報告書に概説してあるのでここでは特に詳述しない。

コロノ労働者の定義・実態に加えて、多くの移民が体験した労働形態であるカマラーダについて触れておくことは後述の移民の職業変遷を理解するのに重要な一助となると考える。前述したようにファゼンダにおける雇用労働形態のひとつにカマラーダ（camarada）がある。リーン・スミス[9]はコロノと同様に、前述のサンパウロ州農務局公刊の小冊子による定義として次のように述べている。

カマラーダとは、契約時に明記された仕事を遂行する義務を負う労働者である。多分これらの労働は、林間焼畑を作ること、牧場の清掃、作物のための除草、収穫とか、その他の役務で農業に必要となりうる

ものはなんでもやる。

カマラーダとして契約される者は、一人でか、小家族（子供12歳以上のアグレガードをもつ）を連れて来るひとびと、或いは契約の代りに固定給で働くことを選ぶ他のひとびとである。…カマラーダはより「臨時的」労働者である。彼らは一日いくらで雇われる。彼らは柑橘類やバナナのプランテーションを含むあらゆる型のエステードでみられよう。

一方、大野、宮崎[10]はカマラーダを次のように定義している。

ファゼンダにおける雇傭労働形態のうちで最も簡単なものである。さらにこれは、一週間を単位として契約が結ばれるところのいわゆるポル・ジーア（Pordia）という日給のものと、エンプレイタ（empreita）という出来高払賃金のものとに分かれる。ポル・ジーアにするかエンプレイタにするかは、労働の種類によって決まる。すなわち収穫時などはエンプレイタにした方が労働の能率が上るために、雇主はこれを用いる。両者とも賃金の支払いは週末であって現金で支払われる。一般に契約は口頭で行われ、労働は最も単純な種類か、あるいは短期間で終了するような種類のものがあてられる。

コロノ・カマラーダの実態についてそれぞれの定義が調査時に得た感触からかんがみ、それらの実態を相互に補充していると考えてあえて引出した。

コーヒーファゼンダにおける生活については数多いレポート、出版物によって詳細に記述説明がなされているが、ここでは特に半田智雄の「移民の生活の歴史」を挙げておくことにとどめたい。

移民はファゼンダ（耕地）で働くためにファゼンダ（耕地）に配置されることを「配耕」されるといい、ファゼンダと耕地のポルトガル語、日本

語の両語名が移民の口から出る。戦前移民の多くはサンパウロ州のコーヒー耕地で労働者として働き、配耕地で契約満了せずに、耕地から耕地へと頻繁に移動した。こうして厳しい耕地での生活のもとで出稼移民としてのあせりがつのり、契約を果さずに耕地から夜逃げ同様に離脱したことを「脱耕」したという表現を使用する。脱耕とは別に、一耕地から他耕地へ引越すことを「エンボーラ」と呼んだ。「エンボーラする」、「エンボーラした」と日本語の助動詞をつけて広く使用された。エンボーラという言葉は、ポルトガル語のirembora（去る、去りゆくの意）から出たもので、移民の人々は独特の使用法を発明した。[11]

一方、初期移民後、1920年代に至ると、移民は、ファゼンダの労働者から借地農へ、さらに自作農へその上昇の道程をたどるにともない、エンボーラの代りに、ムダンサ（引越し、移転の意）という言葉が使われはじめた。ムダンサ mudancaといえば少なくとも家財道具などの財産をまとめての引越であるから、全く裸同様であった初期移民のエンボーラ時代に比較すれば、ムダンサ時代は、やはり移民者の出世コースを意味している。ムダンサ時代に入ると、移民の引越しは、その行動半径のスケールが大きくなった。エンボーラの時代は、耕地から耕地への移動にすぎなかったが、ムダンサとなると1つの沿線地域地方はおろか、他の鉄道沿線地帯へ、さらに他州への移動も行われた。引越しのトラックは家財道具を満載し、その上に家族ぐるみ率いて一気に数百キロも移動してしまうことは珍しいことではなかった。[12] 現地調査において移民はこのように引越したことを「ムダーした」、「ムダンサした」と表現していた。

上述のように、コロノから小作、自作農へと上昇をたどることは、一方では移民がファゼンダとは異った農場で働いたことを意味する。ファゼンダと異った農場とは「植民地」を指摘している場合が大部分である。

ブラジルにおける植民と植民地の発生とその創設について簡単に触れておく。植民は19世紀にはじまり、1850年に売却が公有地譲渡の唯一の合法的方法になったため、計画実施が軌道にのり、20世紀前半において

本来の領域を確立した。

リーン・スミス[13]によると植民とはブラジルにおける最初の入植者の創設を対象とするのでなく、政府や民間の諸機関が大所有地を細分化する際の活動計画ないしは事業を指し、植民と植民地創設は小農階級が土地所有を確立する全てのプロセスを含むものである。一方、ブラド[14]は後述するように一貫して、ブラジル経済発展と労働者確保との拮抗の立場から植民地の発生と発展を捉えようとしている。

植民地の成立発展は1850年以降、数回の危機を経験しながら、南部諸州を中心に白人の自由移民による小農場の普及が伸展し、やがて大所有地制の卓越するサンパウロ州においても波及した。サンパウロ州においては、民間の植民地計画はファゼンダとは競合せず開始された。ブラジルに鉄道を敷設したイギリスの鉄道沿線に植民地を建設したのはその典型的な例である。ちなみに、醍醐麻沙夫によれば、日系人による植民地創設は、笠戸丸移民船の通訳平野運平が大正4年（1915）ノロエステ鉄道線において設立したのがその嚆矢とされている。

日本の植民地は1908年の最初の移民後まもなくしてサンパウロ州に創設され、その後、隣接諸州にもわずかながら設立された。日本人植民地の建設発展は個々の移民、民間人によって建設が進められたが、日本政府機関もまた植民事業に少なからず保護政策を実施した。大半の日本人入植者は農業生産、特に棉花、蔬菜栽培に貢献したし、蔬菜に関する限りその役割は現在でも依然して大きい。

各地における日本人植民地の設立はサンパウロ市から放射状にのびる鉄道沿線上の駅付近で市場向け蔬菜栽培の地を創設した。日本の植民地の確立発展はブラジル小農場制を大いに広げ、同時にブラジル農業、特に今日のサンパウロ市周辺地帯における協同組合の促進に大いに貢献した。ちなみに、日系移民が設立したコチア組合はブラジルではあまりに有名である。

現地調査での印象として、ファゼンダ以外の農場、特に植民地において

かなりの県出身移民が働いた植民地に、ノロエステ線リンスに位置したアリアンサ植民地がある。ブラジルの日系社会で「移民の父」と崇拝されている上塚周平が築いた植民地である。アンケート調査表から任意に植民地名を挙げると、例えば、ピラポジンニョ植民地（ソロカバナ線）、富士植民地（ソロカバナ線）、梅弁植民地（ソロカバナ線）、サンタ・マリア植民地（ノロエステ線）、平野植民地（ノロエステ線）、コレゴリック植民地（ノロエステ線）、プロージャ植民地（カンポ・グランデ）、新垣植民地（ソロカバナ線）、カンガンギ植民地（パウリスタ線）、ヤビク植民地（ノロエステ線）などがある。一方では、パラナ州で水野龍が日系移民のために州知事の認可を得て植民地の開拓を始めているがその年代は、1920年代と推測される。上塚は1929年に植民地建設を手がけていることから、日系移民が小作から自作農へと発展したのはこの時代からであろう。植民地は、日系移民の中で指導的地位にある者が、日系移民の独立発展を目的として建設した日系移民の集団地であった。植民地はその初期において、公有地、ファゼンダの未利用地例えば荒山（林地）等の開拓から出発した場合が多かったようである。植民地では、各家族は最初から小作、土地の購入、売買が可能であった、それ故に植民地は移民にとってあこがれの日本的小規模農業経営の自作農へと転換しさらに飛躍上昇する機会が与えられた場所であったといえる。植民地などの農場では経営形態は多様化し、移民の地位にもまた大きな変化がみられた。ちなみにファゼンダでの賃金労働者から植民地での自営農の立場へ移行する過程を経て、日系人集団地を形成した植民地社会の時代から大きく変貌している今日のブラジル日系社会で、移民は独自のコロニア社会、コロニア文化、コロニア文字、コロニア語などを培ってきた。

(1) 手つだい

第6表の最初の欄に「手つだい」がある。既「研究報告書」の「調査集

計表」の7表で移民の渡航年齢構成をみると、0才から15才までの者が75人も含まれている。これら若年層のなかには、厳しい肉体労働が要求される移民生活の家族労働においてしばらくの間、手つだいという身分でしかなかった。

自由移民、準契約移民が呼寄人の地におもむき、最初は呼寄人の世話を受けて自らの仕事を探す。この間、彼等は呼寄人の農場で無償で働く場合が多々あった。それもわずかの期間であった。この場合も移民は「手つだいをした」といった。ファゼンダからエンボーラあるいはムダンサした移民、または構成家族から離脱、独立した移民は、親戚、友人、知人をつてに各地を移動しながら仕事場を求めた。その過程で数週間から数ケ月にわたり、各農場で世話になった返礼として無償で農業活動などの手伝いを経験した移民が多かった。

他に、自然災害、怪俄、迫害、契約切れによるムダンサなどの理由で、短期間他人の農場で手つだいをした場合がみられた。このように、手つだいは、短期の臨時的地位の形態であり、これには見習、奉行が時たまみられた。

(2) 従　業　員

農業活動における地位に従業員がある。これは、日雇、カマラーダ、コロノ等とは明確に相異した形態であるが、賃金労働者としては同じ形態である。この形態は、多くの場合県出身移民社会においてみられたように、自由移民、準契約移民などが呼寄人の呼寄地に定住し呼寄人の農場で雇用されて労働した場合がかなりあったこのことは、第6表にみられるように、農業の従業者は、1912年に出現しているが、大正7～8年に大量に移民が入った頃から急増し、さらに昭和初期の大量移民が加わって1935年にピークに達していることから容易にうなずける。この雇用労働にかかわった移民のなかには、父親・兄弟の呼寄で移民し、肉親の下で使われた例もみられた。

第6表　職業の地位の年次別累積（1908 ～ 1980）

年＼地位	手つだい	従業員	日雇	コロノ	請負	歩合作	小作	共同経営	自作農	無職	隠居
1908 ネン	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
1909 ネン	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
1910 ネン	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
1911 ネン	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
1912 ネン	0	1	0	5	0	0	0	0	0	0	0
1913 ネン	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
1914 ネン	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
1915 ネン	0	0	1	1	1	0	0	0	1	0	0
1916 ネン	0	1	1	2	1	0	0	0	0	0	0
1917 ネン	1	3	0	29	2	0	0	0	1	0	0
1918 ネン	2	11	2	56	3	0	3	1	1	2	0
1919 ネン	1	22	4	43	3	3	8	3	3	0	0
1920 ネン	2	28	3	24	8	6	16	1	6	0	0
1921 ネン	2	26	5	18	11	6	20	1	6	1	0
1922 ネン	2	24	5	14	15	3	20	1	9	1	0
1923 ネン	4	23	5	9	13	3	26	2	13	1	0
1924 ネン	2	20	4	7	12	1	26	3	22	2	0
1925 ネン	3	24	6	4	12	1	29	3	21	2	0
1926 ネン	6	35	5	4	11	2	36	3	24	2	0
1927 ネン	3	41	4	4	8	4	42	4	30	2	0
1928 ネン	2	41	5	5	7	5	46	3	34	2	0
1929 ネン	6	41	7	7	6	6	53	6	40	3	0
1930 ネン	9	39	7	12	7	8	69	5	39	2	0
1931 ネン	8	41	5	13	4	9	81	7	44	2	0
1932 ネン	8	42	7	20	1	11	90	8	47	2	0
1933 ネン	6	54	8	22	2	13	96	8	53	2	0
1934 ネン	18	56	9	29	3	17	121	12	62	3	0
1935 ネン	13	62	5	19	4	26	142	12	71	4	0
1936 ネン	9	51	6	32	4	22	159	9	82	4	0
1937 ネン	8	43	6	22	4	22	174	11	100	4	0
1938 ネン	9	41	6	11	5	21	190	13	101	2	0
1939 ネン	7	35	4	8	5	22	186	16	112	2	0
1940 ネン	7	29	5	6	4	18	187	16	128	4	0
1941 ネン	4	25	2	5	5	15	188	14	143	4	0
1942 ネン	2	24	2	4	5	13	186	12	145	4	0
1943 ネン	0	28	2	4	6	11	183	9	162	2	0
1944 ネン	1	27	1	4	5	16	170	9	171	3	0
1945 ネン	1	17	1	4	5	12	170	7	180	3	0
1946 ネン	0	13	1	2	4	8	165	7	186	3	0

年＼地位	手つだい	従業員	日雇	コロノ	請負	歩合作	小作	共同経営	自作農	無職	隠居
1947 ネン	0	10	1	3	1	6	155	5	191	4	0
1948 ネン	0	8	1	3	1	3	142	5	190	3	1
1949 ネン	0	7	1	3	1	4	136	4	196	4	1
1950 ネン	0	6	1	2	1	3	133	5	194	3	1
1951 ネン	0	4	1	1	2	4	118	5	198	4	1
1952 ネン	0	4	1	0	2	3	116	5	191	3	1
1953 ネン	0	4	1	0	3	3	107	6	194	3	1
1954 ネン	0	4	1	0	2	4	101	5	190	2	3
1955 ネン	0	4	1	0	2	3	101	4	186	3	6
1956 ネン	1	3	0	0	2	3	96	3	187	3	7
1957 ネン	2	3	1	0	2	4	92	2	179	2	8
1958 ネン	0	6	1	1	1	3	91	3	173	3	9
1959 ネン	0	5	1	1	1	2	86	3	168	3	10
1960 ネン	0	6	0	1	0	1	77	4	161	5	15
1961 ネン	0	3	0	1	0	1	71	4	149	6	18
1962 ネン	0	3	0	0	0	3	67	3	143	4	20
1963 ネン	0	4	0	0	0	2	62	3	132	6	23
1964 ネン	0	2	0	0	0	1	56	3	128	6	30
1965 ネン	0	1	0	0	0	2	50	2	122	6	40
1966 ネン	0	1	0	0	0	1	44	2	122	8	46
1967 ネン	0	1	0	0	0	1	38	1	117	8	53
1968 ネン	0	0	0	0	0	1	36	1	106	7	67
1969 ネン	0	0	0	0	0	1	33	1	98	8	75
1970 ネン	0	0	0	0	0	0	32	1	93	9	94
1971 ネン	0	0	0	0	0	0	33	0	87	8	106
1972 ネン	0	0	0	0	0	0	30	0	82	8	116
1973 ネン	0	0	0	0	0	0	30	0	74	9	135
1974 ネン	0	0	0	0	0	0	27	0	70	9	147
1975 ネン	0	0	0	0	0	0	25	0	64	8	165
1976 ネン	0	0	0	0	0	0	24	0	62	9	179
1977 ネン	0	0	0	0	0	0	23	0	56	9	204
1978 ネン	0	0	0	0	0	0	22	0	55	9	216
1979 ネン	0	1	0	0	0	0	20	0	50	9	238
1980 ネン	0	1	0	0	0	0	20	0	50	9	239

従業員には、他に結婚してもそのまま義父に雇用された場合もあった。前述の「手つだい」にみられたように、エンボーラ、ムダンサの途中にこのような雇用を経験した者があった。さらに、自然災害による失敗、社会的事情などの理由で雇われた例もあった。この地位における就労期間は一定せず、他の地位への移行は後述のプロセスをたどる場合が多かった。

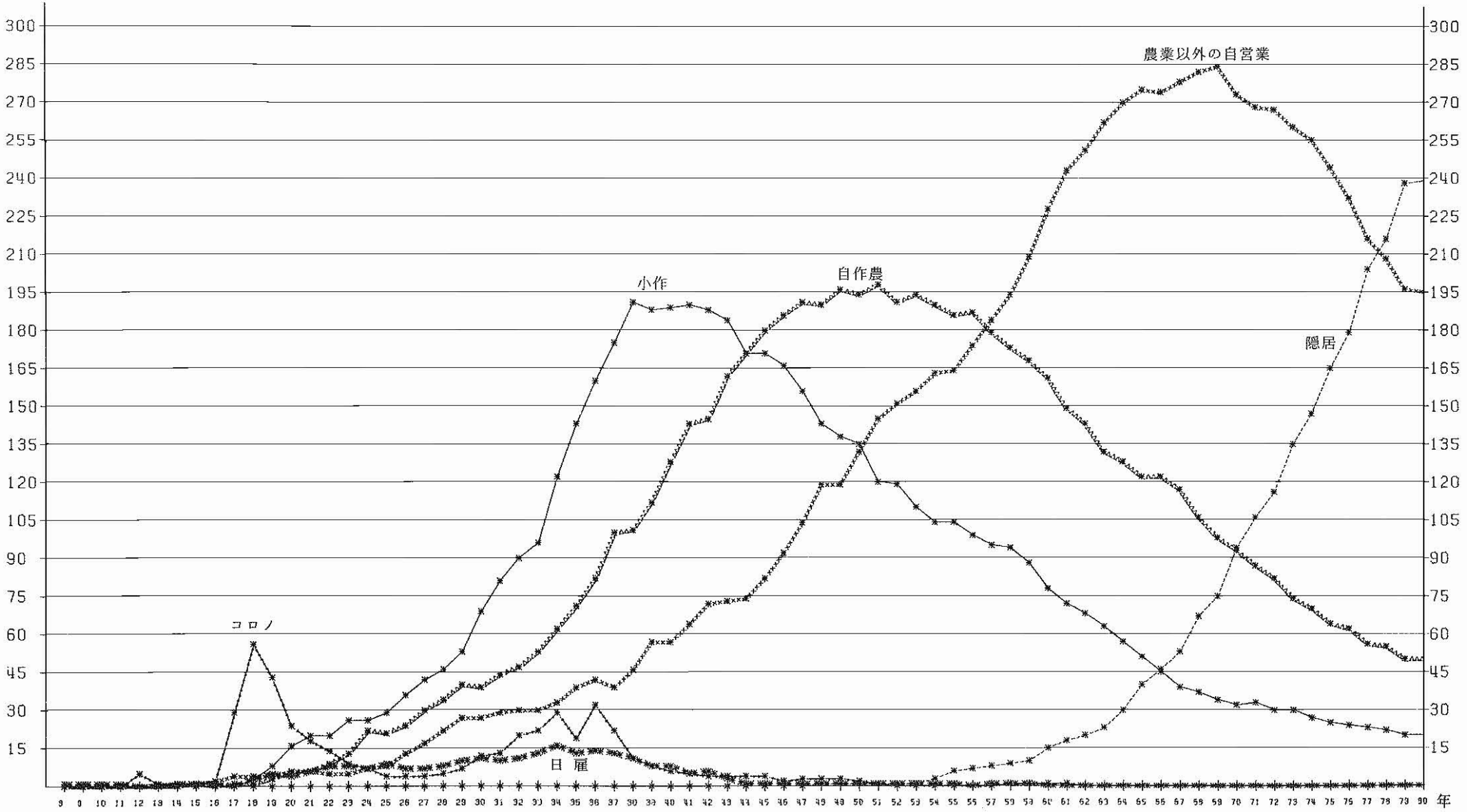
(3) コロノ労働者とカマラーダ

再び第7図と第6表を中心に移民の職業の地位についてその変遷の考察を続ける。前述した通り、コロノ労働者とカマラーダに関して幾分詳細に説明を行ったが、この両労働形態を軸にファゼンダにおける移民の農業活動を地位のプロセスからみてみよう。

第7図に示すように、県出身移民のコロノ労働者は1912年に出現しはじめ、1917～1922年に著しい労働形態となり、その後漸減し、小作・自営などを下まわりつつも、1930年から漸増した。しかし、1936年頃から減少傾向をみせ、その出現は断続しながら1961年に消滅している。このことは移民が同一地域で他の労働形態に移行したり、あるいは他の地域へ移動したことを意味する。Tsuchida の研究によると、1923年の日系移民のコロノ労働者は移民家族の35.4％、人数では34.3％を占めていた（第7表）。

コロノ労働者はファゼンダに入耕すると、可働者数に応じて、例えば、（5人×2,000本）10,000本を一家族で管理したことなどの方法で、コーヒーの木の管理を行っており、他に収穫期には1袋当りの出来高払の賃金を受けている。

コロノ労働者は、上述の定義によれば、ファゼンダにおける典型的な労働形態であることについては論をはさむ余地は殆んどない。しかし、後述するように、植民地においてもコロノ労働者がみられた。このことは、植民地においてもかなりの規模で営農する日系移民が同じ日系移民をコロノ



第７図　移民の主要職業における地位の年次別累積（1908 ～ 1980）

第7表　サンパウロ州における日系移民の職業（1923年）

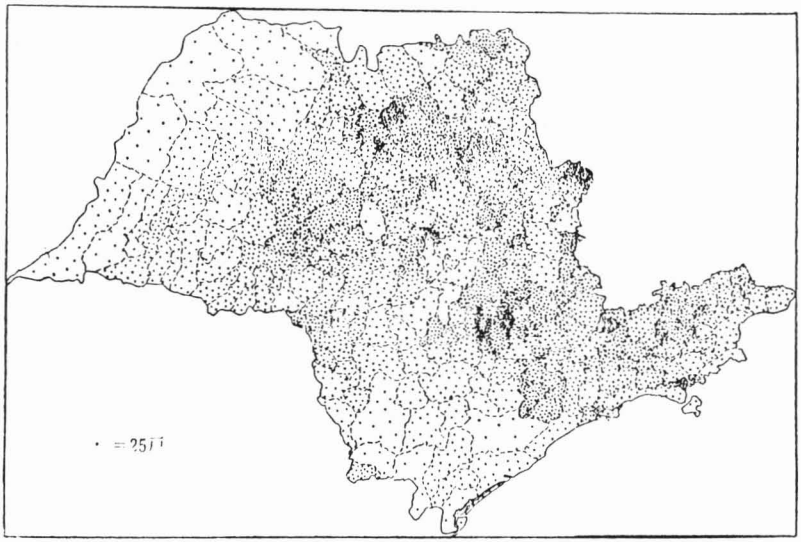
職　　業	家　族　数	人　　数
コロノ労働者	2,350（35.4％）	10,100（34.3％）
借　地　農	1,828（27.6％）	7,565（25.7％）
自　営　農	1,725（26.0％）	7,320（24.8％）
請　負　農	650（ 9.8％）	2,720（ 9.2％）
自営業者		770（ 2.6％）
家　　事		605（ 2.1％）
製造業者	52（ 0.8％）	264（ 0.9％）
商　　人	28（ 0.4％）	135（ 0.4％）

（Tsuchida：1978, P. 203）

労働者を導入して雇用したことをうらづけている。リーン・スミスの研究によれば、1941年サンパウロ州に西部の州境界地帯を除いて広くコロノ労働者が分布していたことが第8図から容易に理解できる。同図によると、モジアナ線、アララクアラ線、ノロエステ線の沿線地帯にコロノ労働者が集中分布している。

ブラジルのサンプルでは、リーンスミス[15]が指摘したように、賃金労働者にはコロノ労働者に加え、カマラーダと請負の農業労働形態しか存在しなかった。伯剌西爾年鑑1933年版の在伯邦人住所録の職業欄に「農労」の名称が散見されるが、これがカマラーダに該当する日本語訳であろう。

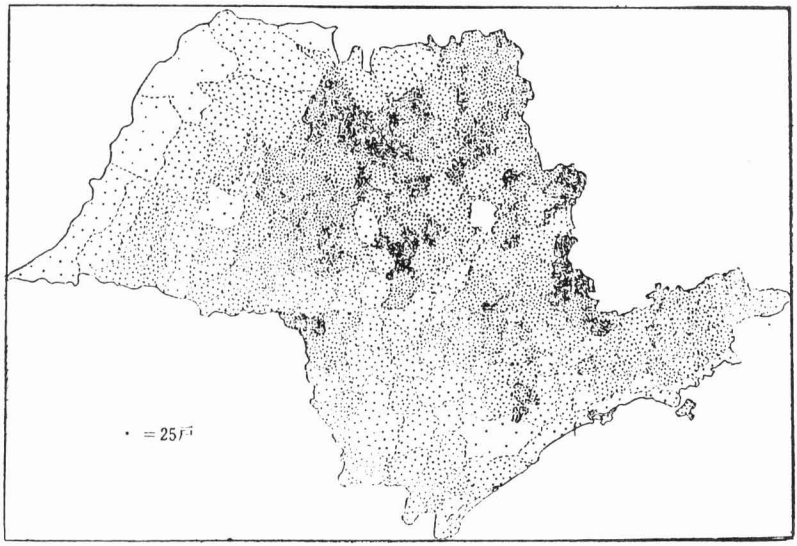
現地調査において、ブラジルにおける移民の職業に関する十分な資料研究なしにアンケート調査を行い、資料整理、集計において、日雇とカマラーダと同一の範疇にまとめて集計したため第6表の「日雇」の欄にカマラーダが含まれる結果となった。同表の「日雇」の欄をみると、笠戸丸移民組1件（サンプルも1件のみ）はファゼンダに配耕され、コーヒー収穫に従事し、労賃は出来高払いでなく日当で支払いを受けた事例である。もともと、日系移民はコロノ労働者として導入されたというのがこれまでの一



第8図　サンパウロ州におけるコロノの分布（194年，郡別）

（リーン・スミス：1954，2，P.99）

般的理解の仕方であることから、配耕後ファゼンダの事情に応じて、コロノ労働者として契約をかわしたが、実質的にはカマラーダの形態をとって就労したことも予想される。Tsuchidaが作成した第7表にはカマラーダの分類が欠落しているがこのことは、日系移民中でカマラーダとしてファゼンダで就労した数が少なかったことによるものと考えられる。しかし、リーン・スミスによれば、サンパウロ州のファゼンダではコロノ労働者とともにカマラーダ的一般労働形態があった（第9図参照）。以上のことから、日系移民もこの形態の労働にかかわったが、伯剌西爾年鑑1933年版を概観して云えるように他の労働形態に比較してその就労者数は少なく、カマラーダは小数型の労働形態と推察される。これを県出身移民のサンプルに限ってみると、移民は各地を移動しながら生産の失敗などの理由でカマラーダとして働いたことが散見された。カマラーダは、コロノ労働者と



第9図　サンパウロ州におけるカマラーダの分布（1941年，郡別）

（リーン・スミス：1954, 2, P.100）

同様に、また植民地やジュキア線地方のような入植地においてもみられ、その形態はファゼンダに準じたものであったものと考えられる。カマラーダの労働内容は、ファゼンダの雑用あるいはコロノ労働者の労働に類似したものであったことは調査時に得た感触とほぼ一致している。

第6表と第7図の「日雇」について説明を追加しておく。日雇は農業以外の職域で、特に都市地域で広くみられたものである。移民は時たま親戚、知人、友人の農場で賃金労働者として短期就労したことがみられる。この場合、彼等は「カマラーダをした」という表現を使用した。農業地域でも農業以外の賃金労働の場合は「日雇をした」と表現し、両者を区別していたことがアンケート資料から判明した。カマラーダは日雇とともに移民にとって底辺の労働形態であり、この地位からコロノ労働者、さらに小作などと上昇の道程を歩んだのである。

(4) 請　負（contrato）

Tsuchidaが作成した1923年のサンパウロ州における日系移民の職業表（第7表）によると、契約農（contract fermers）という分類がなされ、全日系家族の9.8％がこの形態に属している。これは調査において移民がファゼンダなどの農場で行った請負に該当するものと考えられる。

第6表によると、県出身移民で請負を行った者は1917年に出現し、特に1920年代に最多サンプル数が出現している。1920年代末期からその数は漸減し第二次大戦終焉頃まで少数で停滞傾向を示し、その後漸減し、1969年にサンプルから消えている。

請負は契約をかわして行うのが一般の方式である。この生産形態はファゼンダにおいて導入され、その後日系移民間に広く活用されたものであろう。契約は期間で行う場合と、労働量（面積・数量）によって行う場合、あるいは両者を同時に行う場合が考えられる。

ファゼンダにおいてコーヒー、棉花、時たま米などが請負作物であった。期間は単年より複数年で契約した場合が多いようである。コーヒーの場合は一家族で7,000本あるいは、14,000本などと本数で契約をかわしコーヒーの木が幼樹の場合は管理のみ、成木の場合は管理、収穫を請負っている。棉花の場合は出来高制をとり収穫した棉花の重量で契約がなされ、一家族で、例えば4,000アロ[16]あるいは1,400アロなどといった方法をとっていた。米の場合は棉花と同様の重量方式をとっていたがこの場合、袋数で契約がなされたが、その内容が籾か精米かは判明しない。また袋の重量も調査時に聴取からもれていて判明しない。

前にちょっと触れたが、移民の中には、ファゼンダ主などと契約をかわし荒山（山林）開拓を行った者があった。この場合、期間でなく面積で契約して請負っている。例えば一家族で5アルケール[17]、8アルケールなどと一家族の男性労働力中心に行った。山林の伐採は困難極まる作業でこの種の請負数はそれほど多くない。

請負契約金の支払いは賃金として月払い、あるいは収穫後に一括して支払われるなど個々の契約、作目によって相異したらしい。そのため移民は自給作物、家畜の生産を計画的に行う必要が惹起したことは云うまでもない。このような請負者の生活状況に対しファゼンダ主も多少の配慮をしたため、間作、外作の制約条件が緩和され、かつ外作地の面積の拡張も認められた場合が多い。

ファゼンダにおいて、コロノ労働者、カマラーダによる生産方式に加えこのような請負による生産方式の導入は、ファゼンダ本来の経営法を変質せしめ、ついにはファゼンダの解体につながる重要な要因のひとつであることを意味する。

伯刺西爾年鑑1933年版で日系移民のファゼンダにおける作物、地位など概観するとかなり多くの者がコーヒー、棉花を請負って生産に従事していたことがうかがえる。

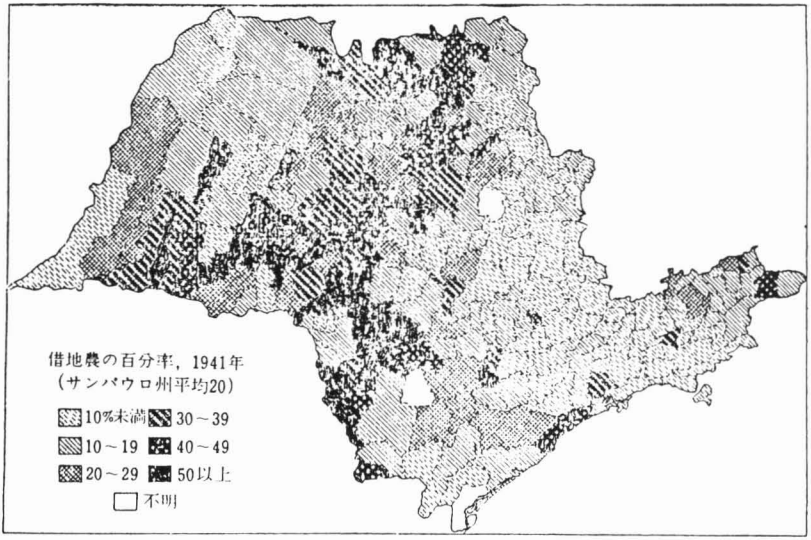
(5) 小作農（rendeiro）

第7図をみると、県出身移民の農業活動における就労形態が初期のコロノ労働者、カマラーダから小作農（rendeiro）へ、小作農から自営農へと時系列的にサイクルが明瞭に表現されている。小作にかかわった移民はサンパウロ州では1918年から出現している。1920年からその数は急増傾向をみせ、1938年にはいずれの分野よりも多くの移民が小作に従事していた。1938年から1941年まで小作はシーリングを形成しており、1942年からやや漸減傾向をみせつつも第二大戦終了の頃までかなりの移民が小作を行っていた。この減少傾向は1950年代に至りなお継続しているが、1950年代まで小作に従事した移民は農村地域において就労した者がその大半であり、ファゼンダ、植民地等での小作農であった。一方、1950年代後半頃から1980年代にみられる小作農は生産地と生産内容が相異している。1950年代から1960年初期まで移民が農村地域から都市域へ大量

に移動した結果、移民による小作農はサンパウロ大都市圏、カンポグランデ、地方都市において近郊蔬菜園（chacara）経営に転換した者に借地農が多い。

サンパウロ州において1920年代から連続的コーヒー不況から十分恢復し得ないままに、大農園の伝統的土地利用は大きく転換せざるを得なかった。ドレイ解放後、ファゼンダなどの大農園経営において常に問題となったのは労働者の確保であった。[18] やがてファゼンダにおいて労働者確保の困難が大農園経営の危機をもたらした。コロノとして移民した日系移民も例外なく賃金労働者から自立をめざし摸索した。この時、ファゼンダの危機の間隙を活用し小規模自営農（小農場）の地位を得るために着実に努力したのである。この地位へのアプローチとして最初の段階が小作農あるいは借地農であった。

植民地における小作農、自作農の多出は別として、ファゼンダへ小作農



第10図　サンパウロ州全農場経営者中の借地農の比率（1941年，郡別）

（リーン・スミス：1954，2，P. 98）

が導入されたことはファゼンダが内抱していた土地細分化を更に強化したひとつの原因でもあった。1941年サンパウロ州各地域において小作が広く実施されていたことは、リーン・スミスが作成した図（第10図）から十分理解できる。また小作率が1930年代から急速に展開した棉花栽培地域において高率地域を形成している。ブラド[19]によると、ブラジルにおける棉花生産のブームは、その大半が日系移民を含む日本人のイニシアチーブによるものであった。このことは日本の繊維工業と密接な関係がみられ、原料獲得のため、1930年以降日本、ブラジルの両政府が同調政策をとり、特に日本政府はブラジル棉花を重視した。日本はブラジル産棉花の最大の買い手となり、1935年にはブラジルの棉花の輸出総量の60％を占めるに至った。

ファゼンダあるいは植民地での借地は普通は複数年の期間で契約を行われ、家族の可働者量に見合った面積を借地する場合が多かった。また、栽培作物の種類によっても借地面積は各家族間で大きく相異したようである。移民のなかには、カボクロ[20]や同じ日系移民をカマラーダとして使用するほどの規模の経営をする者があり、県出身移民においても同様の者がかなり存在した。

ちなみに、県出身移民サンプルで小作就労者がシーリングに到達する直前、日系移民が生活したファゼンダ、植民地・駅付近の農園でかなり多数の日系人が、コーヒー、棉花などを小作したことがうかがえる。[21]

(6) 歩合作（meieiro）

小作形態には上述の小作農（rendeiro）に加え、歩合作（meieiro）の二つの型がブラジルの農業で広く行われていたが、統計上両者の分類が存しないとリーン・スミス[22]は述べている。ブラジル調査において、県出身移民が、各地のファゼンダを中心に、「5アルケールをアレンダした」と前述の借地による小作を行ったのに対し、「6アルケールをメイヤした」と

いう表現も、移民の口をついて出た。歩合作物は大半が棉花であったといえる。地主対歩合作者の契約は、棉花の場合、面積でなく、収穫量の歩合でかわし、その比率は地域によって相異したが、6：4、5：5、4：6、などの場合があった。移民は小作と歩合作を往来して行った場合が多かったが、終局では前述の小作に集中する傾向がみられた。

第6表によって県出身移民が歩合作にどのようにかかわったかをみると、その就労者数は小作農に比較してはるかに少数である。それは1913年からみられるが、顕著な出現は棉花ブームとほぼ一致した時代の1930年代から1940年代であった。第二次大戦後その数は減少し、その人数に変化をみせながら1969年にはサンプルから姿を消している。

(7) 自　作　農

前述の歩合作・小作から地位上昇し、小農場を経営する自作農への道程は、農業分野でたどる最終段階であることは大半の移民について言える。先輩移民のイタリア、ドイツのコロノ移民が経験したであろう地位の上昇プロセスを日系移民が継承し同じ道程を歩んだ。各国移民がこのようにコロノ労働者から出発して展開をみせたサイクルは、職業のサクセッションとして把握することができる。

自作農として小農場を獲得したのは、県出身移民サンプルでは1915年に出現しているが、先述したように各地の日系植民地において初期自作農が発生したであろうことは想像にかたくない。その後、自作農はファゼンダにおいてその発達がみられたが、このことはファゼンダの解体と小作農、自作農の導入と深い関係があることを物語っている。

ブラドの[23]研究を中心にそのプロセスを概略する。ブラジルの南部、特にリオ・グランデ・ド・スール州とより小規模にサンタ・カタリーナ州とパラナ州において19世紀後半に外国人植民を導入した。サンパウロ州とは異なり、これらの地方は温帯地域で、熱帯的大農場は存在せず、移民は賃

金労働者でなく、小耕地を購入し定着した。これらの地方では、経済社会組織が他地方と全く異なり、大農園の欠如、輸出向けのコーヒー、砂糖、棉花の大農場のかわりに、国内市場への供給を目的とする小農場と、その他の穀物、ブドウ酒、牧畜などの生産地域を形成した。これらの地域は、当初は、ブラジル経済全体にとって小さな意義しかもたなかったが、その重要性は時とともに増し、今日のブラジル経済活動においてかなり顕著な地位を占めている。

ブラジル全体として、コロノ移民のほかに自由移民によってつちかわれた自由労働制度はブラジルの生産体制の発展を保証したが、他方ではその体制の基礎構造、すなわち土地所有を解体させる強力な要因のひとつが顕在化した。農業労働力の獲保の不安定化は労働者の不断の移動あるいは他国へ再移動という現象を頻繁に生起せしめた。移民は農園から農園へ頻繁に移動したが、特に大農園制において自由労働者を適応させるのは容易なことではなかった。自由移民の初期入植において時には国家、州ともに入植を魅力あるものにするため移民が小農場を取得することを積極的に促進した。

大農園制が各地において経験した危機とその結果の衰退は、一方では小農場に基礎をおいた小規模自営農の出現を促進した重要な状況であったが、当初、このあらたな農業組織の確立と発展を条件づけた直接的な、最も重要な要因は、19世紀の大規模なヨーロッパ系移民と、20世紀にそれを補強した日系移民とであった。

サンパウロ州において小農場制の普及は、特にコーヒー園の連続的危機と州の経済および人口の成長に関連して推進された。常に空間移動しているコーヒー農業は、そのあと疲弊地や耕作に役立たない土地を残していった。価値の低下したこのような土地と、他にコーヒー栽培には不適な自然条件の土地が農村人口のより貧しい階層に使用され、そこで彼等は小規模の小自作農を始めたのである。このように、サンパウロ州においてコーヒー農業との競合が存在しない地域に自作農による小農場が分布する結果をみせている。また、大農園の発達しなかった地域に小農場が分布したとい

える。

一方、小農場の普及を最も促進したのは都市化の発展と工業地域の形成である、そこに供給するための食料品―野菜、果物、花、鶏卵など―の生産は、粗放的、モノカルチャーに基く大農場の伝統的農法とは両立しなかった。小資本による小規模農業経営を行う自作農場はファゼンダ主にとって魅力あるものでもなかったため、このような農業形態の出現の素地があり、その発達がみられたのである。

このように、ファゼンダの大農園経営はコーヒー農業の危機とブラジルの工業化の勃興の間に立ち、請負、小作への土地利用から、土地の細分はやがて小農場の出現と発展を土地制度の中に導入せざるを得なくなり、賃金労働者が独立自営の地位を獲得し自作農が広く伸展した。

再び、県出身移民サンプルに戻って考察を続けることにする（第7図）。自作農は1920年に入って増加傾向をみせ、特に1924年から1950年までコンスタントに増加している。1950年代に至りこの傾向は減少の一途をたどり、1950年後半から1960年中期まで農業以外の自営業が増大するのと対象的な傾向をみせている。

現在、大半の自作農は地方の農村地域、地方都市を中心に経営がみられるが、大都市周辺でのシャーカラを経営する者も含まれている。

(8) 農業の共同経営

第7図の自作農には農業の共同経営が含まれていない。アンケート調査資料の分類において自作農の地位にあるが共同経営を行った場合がかなり出現したのであえて別項をたてて集計した。これを第6表に基づいてみると、サンプル数からすれば自作農よりはるかに少ない。しかし、その出現は自作農と同時代にみられ、かつ、増加―最大値―減少傾向も自作農の場合とほぼ一致している。

農業の共同経営を行った理由と経緯は移民の空間移動と職業変遷との関

係からみると移民の行動のひとつの側面がうかがえて興味深い。共同経営の相手には兄弟、義兄弟、義父などが一般的であった。特に、義父との共同経営はファゼンダ、植民地などで移民が結婚した直後に多くみられた。兄弟、伯父などによる共同経営は、請負、小作あるいは歩合作から脱却し、経済的に幾分余裕が出た頃に行われ、耕地あるいは林地を分割払いで購入して行っている。

共同経営は、特殊な経営でない場合を除いては各移民が独立して自作農へ移行する前段階の経営形態である。一般の耕種農業の場合は共同経営から自作農へとかわって消えてゆくが、精米業、コーヒー加工工場などを含む複合経営の場合は現在でも兄弟、親戚による共同経営が地方都市においてみられる。

Ⅳ　農業生産活動からみた移民の職業および地位の変遷の時系列分析

ここではおもにブラジルにおける沖縄県出身移民の農業生産活動からみた職業および地位の時系列データに多変量解析を施し、これらの変遷を定量的に分析してみることにした。いわばそれぞれの移民の時代、ブラジルの発展と都市化の経緯の中で、成長および衰退していく職業・地位の分類とその変化を説明する因子を理解することを目的とした。

これらの2つのグループの変遷の分析に用いた手法は、①偏バリマックス法（Partial Varrimax Method）の因子分析とクラスター分析である。②偏バリマックス法により得られた因子負荷量は第1因子の場合はX軸に、第2因子の場合はY軸に表現し二次元分布図を作成する。③さらにクラスター分析によりグルーピングを行い、④これらの結果より第1因子と第2因子の説明を行う。

職業の場合の変数としては16業種（ここでは特に農業より米、コーヒー、棉花、果樹、野菜、雑作の6変数を抽出し、他の職業は大分類の林業、

建設業、サービス業、運輸・通信、卸小売、製造業、金融・保険、不動産、家事、無職・隠居の10変数）とした。

地位の場合の変数としては12種（特に農業より手伝い、従業員、日雇い、コロノ、共同経営、自作農、小作、歩合作、請負の9変数を、他の職業より従業員、経営主、隠居の3変数）とした。

職業および地位の変量の数（サンプル数）は時系列データの全体的な流れをみるため、1908年から1980年までの73とし、今回は社会構造の背景を考慮して戦前および戦後の分析は行なわなかった。

また因子の数とはじめに主因子法を適用する因子の数はそれぞれ5で、因子負荷の精度は10^{-5}とした。

なお分析に使用した時系列データはブラジル在住者がどの年次にどの職業および地位にあったかを示す年次別累積である。

分析の結果得られた職業および地位の変数間の相関係数は第8表および第9表に示すとうりであり、職業および地位の第1因子と第2因子までの累積変動説明量がそれぞれ78.5％、74.5％となった（第10, 11表参照）。クラスター分析により得られた連鎖図と因子分析により得られた二次元分布図（第11, 12, 13, 14図参照）によると両者とも大きく3つのクラスターに分類が可能である。

さて職業の二次元分布図（第12図）により職業の第1因子と第2因子の軸は次のように解釈できる。

①第1因子の因子負荷量をみると正の値で大きな変数は急速に就業者数が増えた卸小売業、隠居・無職、製造業等が並び、負の値で大きな変数は林業、米、コーヒーが並んでいることから、第1因子（X軸）は成長・衰退を示す軸と判断できる。つまり因子負荷量が1.0に近づく程、成長が激しい業種、－1.0に近づく程、衰退が激しい業種と言える。また②第2因子の場合をみると因子負荷量が1.0に近づく程、衰退が極めて急激であった米、コーヒー、棉花、果樹、雑作等があり、－1.0に近づく程、コンスタントに成長増加してきた隠居・無職、不動産があることから第2因子は

第 8 表　職業の変遷の相関係数

対照番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
1	1.000															
2	0.876	1.000														
3	0.705	0.656	1.000													
4	0.099	0.337	0.389	1.000												
5	0.219	0.389	0.661	0.904	1.000											
6	0.258	0.491	0.629	0.882	0.925	1.000										
7	0.781	0.744	0.620	0.013	0.206	0.273	1.000									
8	0.195	0.263	0.312	0.671	0.639	0.628	0.152	1.000								
9	−0.473	−0.405	−0.212	0.528	0.376	0.220	−0.554	0.489	1.000							
10	−0.457	−0.308	−0.149	0.689	0.526	0.408	−0.517	0.560	0.966	1.000						
11	−0.506	−0.396	−0.332	0.409	0.224	0.138	−0.581	0.344	0.849	0.839	1.000					
12	−0.464	−0.457	−0.299	0.268	0.167	0.000	−0.521	0.257	0.731	0.712	0.686	1.000				
13	0.338	0.322	0.356	0.583	0.489	0.393	0.002	0.531	0.577	0.554	0.433	0.252	1.000			
14	0.207	0.324	0.399	0.875	0.766	0.680	−0.041	0.640	0.642	0.715	0.481	0.402	0.836	1.000		
15	−0.396	−0.289	−0.243	0.524	0.327	0.224	−0.508	0.511	0.954	0.937	0.863	0.753	0.582	0.651	1.000	
16	−0.476	−0.578	−0.326	0.004	−0.015	−0.239	−0.487	0.123	0.655	0.563	0.581	0.915	0.131	0.177	0.641	1.000

対照番号（1. 米　2. コーヒー　3. 棉　花　4. 野　菜　5. 果　樹　6. 雑　作　7. 林　業　8. 建設業　9. 製造業　10. 卸小売　11. 金融・保険　12. 不動産　13. 運輸・通信　14. サービス業　15. その他の職業　16 隠居・無職）

第 9 表　地位の変遷の相関係数

対照番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1	1.000											
2	0.867	1.000										
3	0.846	0.916	1.000									
4	0.524	0.556	0.566	1.000								
5	0.663	0.698	0.551	0.246	1.000							
6	−0.185	−0.155	−0.297	−0.360	0.393	1.000						
7	0.380	0.454	0.268	0.033	0.883	0.717	1.000					
8	0.762	0.800	0.625	0.385	0.909	0.203	0.785	1.000				
9	0.373	0.592	0.648	0.304	0.269	−0.234	0.124	0.301	1.000			
10	0.429	0.402	0.222	0.027	0.746	0.571	0.756	0.683	−0.019	1.000		
11	−0.437	−0.553	−0.618	−0.501	−0.261	0.521	−0.027	−0.343	−0.557	0.310	1.000	
12	−0.289	−0.405	−0.416	−0.296	−0.417	−0.100	−0.338	−0.357	−0.387	−0.113	0.593	1.000

対照番号（1. 手伝い　2. 従業員　3. 日　雇　4. コロノ　5. 共同経営　6. 自作農　7. 小　作　8. 歩合作　9. 請　負　10. 他の職業の従業員　11. 他の職業の経営主　12. 隠　居）

第10表　職業の入力変数と因子負荷量

対照番号	因子負荷量				
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
1	−0.333	0.800	0.463	−0.012	0.002
2	−0.210	0.880	0.203	−0.115	0.056
3	−0.037	0.858	0.048	0.278	−0.280
4	0.726	0.578	−0.292	−0.045	−0.035
5	0.582	0.696	−0.303	0.223	−0.122
6	0.455	0.755	−0.426	0.092	0.001
7	−0.451	0.716	0.200	0.235	0.253
8	0.619	0.480	0.023	0.081	0.546
9	0.947	−0.215	0.060	−0.078	0.015
10	0.981	−0.095	−0.106	−0.059	0.029
11	0.836	−0.312	0.026	−0.170	0.052
12	0.749	−0.402	0.217	0.395	−0.055
13	0.638	0.440	0.458	−0.339	−0.162
14	0.793	0.515	0.119	−0.116	−0.168
15	0.936	−0.186	0.146	−0.109	0.102
16	0.588	−0.539	0.335	0.487	−0.050
固有値	7.191	5.382	1.077	0.785	0.534
変動説明量(%)	44.9	33.6	6.7	4.9	3.3
累積変動説明量(%)	44.9	78.5	85.3	90.2	93.5

第11表　地位の入力変数と因子負荷量

対照番号	因子負荷量				
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
1	0.860	−0.129	0.358	−0.013	−0.141
2	0.934	−0.176	0.158	0.116	0.000
3	0.857	−0.365	0.130	0.164	0.016
4	0.547	−0.447	0.208	−0.488	0.448
5	0.861	0.432	−0.038	−0.028	−0.123
6	0.037	0.902	−0.295	0.008	0.191
7	0.655	0.690	−0.191	−0.011	−0.024
8	0.903	0.277	0.117	−0.068	−0.135
9	0.554	−0.420	−0.275	0.569	0.300
10	0.538	0.730	0.223	0.025	0.116
11	−0.557	0.660	0.349	0.122	0.252
12	−0.549	0.125	0.710	0.256	−0.019
固有値	5.842	3.093	1.104	0.690	0.458
変動説明量(%)	48.7	25.8	9.2	5.8	3.8
累積変動説明量(%)	48.7	74.5	83.7	89.4	93.2

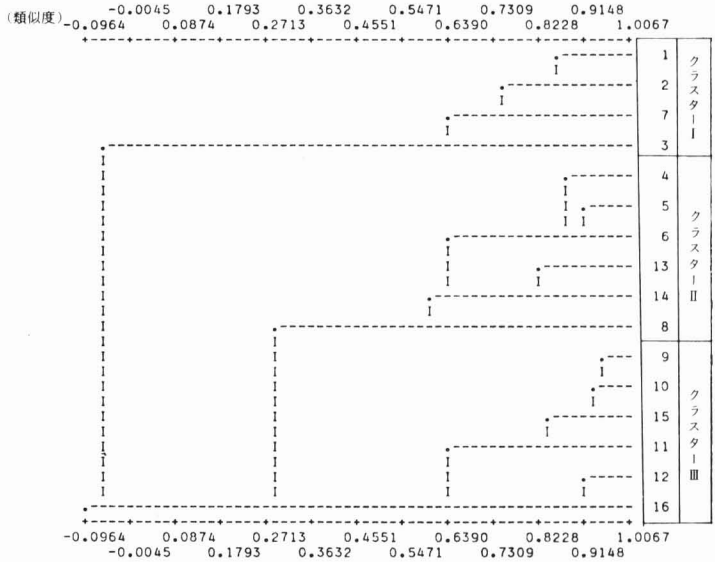
時系列上において成長、衰退の度合又は傾きを示す軸と考えられる。

以上の観点に基づいて各々のクラスターの特徴を述べるとクラスターⅠは衰退しつづけて行く業種であり、米、コーヒー、棉花などがある。またクラスターⅡは多少増加傾向にあったにもかかわらずやがては衰退していく業種、例えば農業の雑作、果樹、野菜などがそれである。クラスターⅢは今後も著しい増加傾向をもつものであり隠居・無職、不動産があげられる。つまり農業の衰退に逆流したものと考えられる。

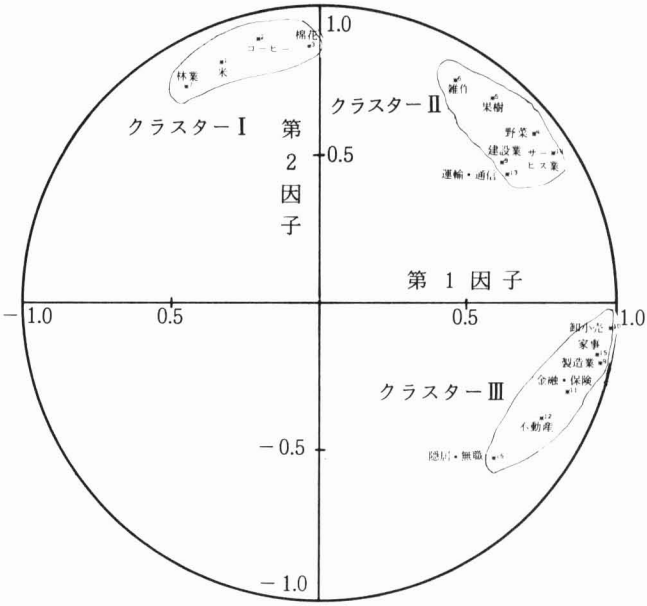
さらに地位の二次元分布図（第14図）を職業分布図と見比べてみると地位の第1因子と第2因子の軸は職業のそれらと全く別な特徴をもつものと考えられる。つまり③第1因子（X軸）の因子負荷量をみると、正の値で大きな変数は前半（戦前）において就業者数の増加が激しく、逆に後半（戦後）衰退が激しかった地位である従業員、手伝い、日雇、歩合作等が並び、ゼロ値の近くに戦後増加はしたものの現在減少傾向にある自作農、さらに負の値が大になればなる程、戦後から現在に至り急激に増加してきた隠居や経営主（農業以外の職業）がある。それ故に第1因子は歴史的な流れの中にみる成長、衰退の軸ということになる。

次に第2因子（Y軸）をみると、正の値で大であるのは自作農、他の職業の従業員および経営主や小作農が並び、逆に負の値で大になっているのはコロノ、請負、日雇で、ゼロの値に近い箇所で隠居、手伝い、従業員が並んでいる。つまり④第2因子は時系列上においてどれだけ長い期間ある地位にいたかをみる、いわば地位の継続性の軸といえる。

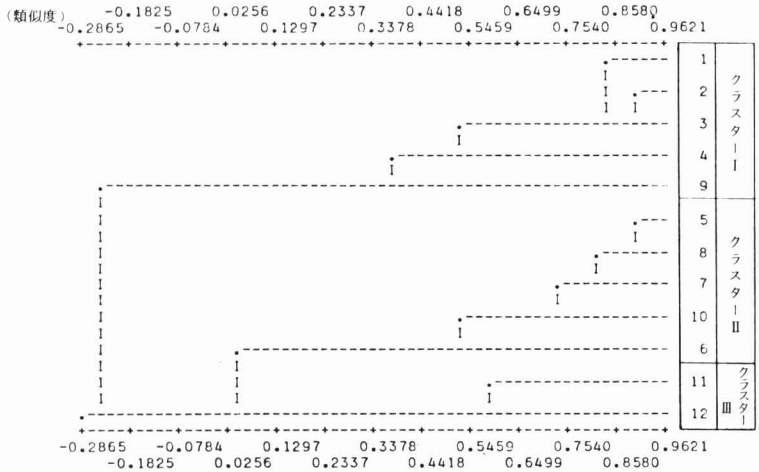
ここで地位をクラスター毎にみると次のように説明できる。クラスターⅠは戦前（時系列上で前半）、すなわち移民当時の地位で戦後まで継続があまりなかった手伝い、従業員、日雇、請負やコロノである。またクラスターⅡには歩合作、共同経営、小作、自作農があり、中でも歩合作や共同経営は継続性が低く、自作農や他の職業の従業員は継続性が高い。最後のクラスターⅢは戦後から現在に至るまで急速に増加した隠居と他の職業の経営主があるが、隠居は近年増加したために継続性は低いが、他の職業の



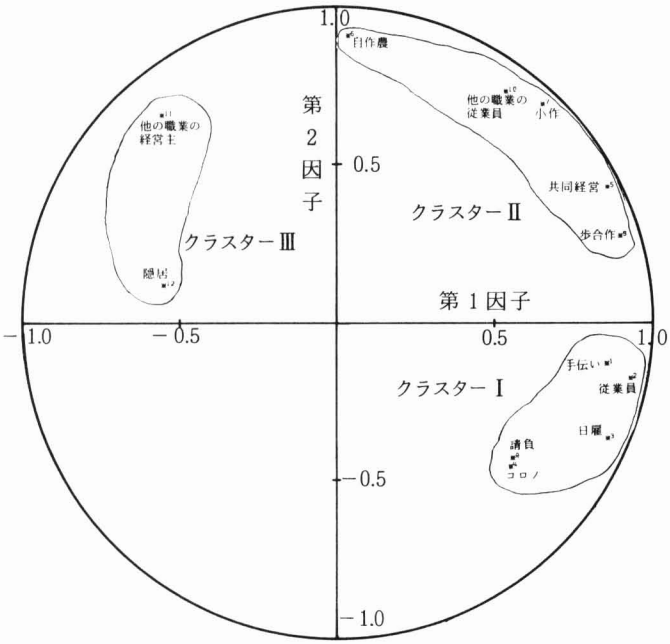
第11図　職業の連鎖樹



第12図　職業の二次分布図



第13図　地位の連鎖樹



第14図　地位の二次元分布図

経営主の場合は隠居に至るまでの当然の地位の変遷と考えられ継続性が高いことは容易に理解できる。

V　総　　括

最後に農業活動において就労者数は、初期移民から現在に至り全体として減少していることについて、次の機会に補足説明を行うことにするが、それらはこれらの多くの移民が農村から都市へ流入し、都市型の二、三次産業分野の職業に換えたことによる。さらにサンプリングが戦前移民の古い移民を中心に対象としたため、多くの移民が高年齢に至り、隠居の時代に到達したことにも由来する。

1950年代から1960年代にかけて移民が農村地域から大都市、地方都市に集中したのは、前述したように、ブラジルにおける都市化と工業化の急激な伸展が最も重要な要因であったといわれるが、他方では農村における土地制度と土地利用の新しい動きもまた移民の都市流入、離農を促進する条件として捉えておく必要がある。移動するプランテーション作物のなかで、サトウキビ栽培が近年サンパウロ州において急激に拡大しつつあることは既述の通りである。サトウキビに加え、顕著な土地利用は牧畜の拡大である。サトウキビと牧畜は1960年初期から新しい土地利用のサイクルとして著しい傾向がみられた。これらの土地利用は、現地調査において、他の土地利用に比較して空間的に明瞭な景観を形成していることが確認された。

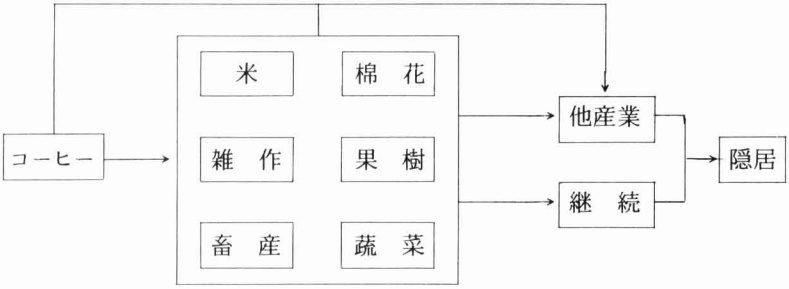
このような土地利用の動きは、土地の再統合を意味し、大土地所有者による小農場の再吸収が進行していることを意味する。最近のブラジル農業の新しい変化として、Becker[24]は詳細に説明しているが、ブラジルの工業化が急速に進行しつつあるなかで、ファゼンダを中心とするプランテーション農業と小農場による二重構造がネオ・コロニアリズムとして発展・定着するかにみえた。しかし、このネオ・コロニアリズムと工業化による産

業構造のひずみとして大土地所有によるプランテーションはネオ・コロニアリズムを排除する立場をとり、自らの新しい活路をめざして土地の再統合を開始した。新しいプランテーションと大土地所有制の台頭である。

この大土地所有制の復活に伴う土地の再吸収の渦中で小農場を経営する移民は自らの意志で農地を売却し都市域へ移動したが、他に農業を継続して行う意志のある移民がこの土地の再吸収による強引な買収に抗し得ず、やむなく土地を売却して移動した者があった。

移民と作物とのかかわり、農業活動における地位の変遷はブラジルにおける移民の空間移動と表裏一体の対象として考察されてよい。ここで、これまでの考察を概略して本稿のまとめとする。

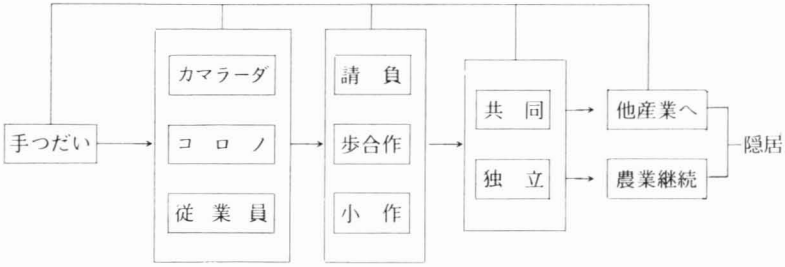
移民の農業活動における作物・家畜とのかかわりは、それぞれの時代を背景にブラジル経済システムのフレイムワークの中で位置づけて把握することが最も適切なアプローチであると考える。移民と作物・家畜とのかかわりを時系列的に概略したのが第15図である。図中の矢印によって示した関係は全ての移民が経験したことを意味しないということに留意する必要がある。ある移民は移民年、それぞれの時代を背景に直接、米、棉花、果樹などの農作物とかかわったし、コーヒー、米、棉花、雑作、畜産、蔬菜などの中、2～3種に同時にかかわった場合がある。またこれらの殆んどの作物間を反復・往来してかかわったのも事実である。



第15図　移民と作物とのかかわり —時系列— (概略図)

移民は現在においてもそれぞれの特定の作物栽培を継続している。他方では、飛躍していずれの作物とのかかわりから他産業部門へ転換した事例が多くみられたが、このことについて次の機会に考察したい。

移民の農業活動における地位の変遷は、移民の動機との関連からも検討を加え考察する必要があると考えるが、今回は特に言及しなかった。しかし、戦前移民の大半が錦衣帰国をめざして出稼移民として南米大陸に到来したし、初期のファゼンダにおける賃金労働者からより財産形成上経済効率の高い独立農へと地位上昇の道程を歩んだのは調査の結果をまつまでもなく広く認められている事実である。しかし第16図に示すように、移民はこの地位上昇プロセスにおいて常に順調に階梯を経てきたのではない。入植時代、個人の事情、ブラジル社会、経済環境等にかんがみ、賃金労働者として各地を頻繁に移動しながら、コロノ、カマラーダ、従業員等の地位を往来しつつ収入良好の土地へと志向して移動した。請負、歩合作、小作の場合も同様の空間的移動と地位の変動を経験した。今日において、



第16図　農業活動における地位の変遷 —時系列—（概略図）

農村地域における小農場（sitio）経営と地方都市・大都市周辺での蔬菜園（chacara）経営者は農業活動を継続して行っているが、他方では農業における各地位から各産業へ直接転換している。

移民と作物とのかかわり、農業活動における地位など、職業の変遷は、

行動科学のモデルをもって説明するとすれば、それは意志決定モデルの作業仮説あるいはフレイムワークをもって行うことが最も妥当なアプローチであると考える。

謝辞

1979年から1980年にわたりブラジルにおける調査に際して、沖縄県人会では屋比久孟清会長（当時）はじめ事務局の金城孝旺氏、宮城富次郎氏、長堂忠三氏、徳田有示郎・嘉陽相備両副会長をはじめ、理事会の皆さんには格別のお世話をいただいた。また各県人会支部では支部長や皆さんに便宜を計っていただき、調査対象となった移民の方々は積極的に協力していただいた。

他にブラジル・アルゼンチン・ペルー滞在中には多くの方々の御協力と御配慮をいただいた。ここに心からお礼と感謝を申上げる。（徳田有示郎前会長が急逝された、この機会に記して御冥福を祈ります。）

本稿を執筆するにあたって、比嘉マリアさん、与那嶺真次君にはいろいろと御教示をあおいだ、記して感謝を申し上げます。

後記

本稿は「南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究」1980年3月文部省科研費　海外調術調査　課題番号504342（代表者：田里友哲）のブラジルの部から特に農業における職業変遷について考察したものである。二、三次産業の職業変遷については次の機会に考察したい。

コンピュータ作表、作図および分析は琉球大学法文学部地理学教室のPANA-FACOM－U100とそれに連結されたXYプロッターを使用した。

（注）

(1) 田里友哲・中山　満・石川友紀・島袋伸三・目崎茂和　文部省科研費海外学術調査による。

(2) 斎藤宏志・中川文雄（ラテンアメリカ現代史Ⅰ） pp. 79～80
(3) 香山六郎編（移民四十年史） p. 24, pp. 38～45
(4) 花城清安（私の戦後史） p. 278
(5) 大野盛雄・宮崎信江（小商品生産農家の成立） p. 145
(6) 大野盛雄・宮崎信江 前掲書 pp. 145～146
(7) 前山 隆（非相続者の精神史） pp. 76～78
(8) リーン・スミス（ブラジル―住民と制度 2） pp. 100～101
(9) リーン・スミス 前掲書 p. 145
(10) 大野盛雄・宮崎信江 前掲書 p. 145
(11) 斎藤宏志（ブラジルにおける日系人の人口と地域的移動） pp. 28～29
(12) 斎藤宏志 前掲書 p. 29
(13) リーン・スミス 前掲書 p. 160
(14) ブラド（ブラジル経済史）
(15) リーン・スミス 前掲書 p. 99
(16) アロはポルトガル語の重量単位（arroba） 1アロバは15kg
(17) ブラジル独特の面積単位（algueire）アルケイレ・パウリスタ（algueire paulista）は2.4ha、単位面積は各州により異る。
(18) ブラド 前掲書 p. 278
(19) ブラド 前掲書 p. 368
(20) caboclo、最初は馴化したインディアンに与えられた名称だが、のちに白人とインディアンとの混血を指すのに用いられた。現在は下層の農村民、農業労働を指すのに用いられている。
(21) 伯剌西爾年鑑 1933年
(22) リーン・スミス 前掲書 p. 97
(23) ブラド 前掲書 p. 96
(24) Becker, B."Agriculture in Brazil: The Expansion of the Agricultural Frontier," pp. 121～169

参 考 文 献

Atlas do Brasil (1964) I.B.E.G. Conselho de Geografia, Rio de Janeiro

Becker, Bertha K. (1980) "Agriculture and Development in Brazil :

The Expansion of the Agricultural Frontier," in Becker, B., Geiger, PP. and Faissol, S. (eds.) BRAZIL : SPATIAL ORGANIZATION, I. B. E. G. −Comissao Nacional da Uniao Geografica Internacional − A Contribution to the 24th International Congress of Geography in Tokyo − 1980, pp. 121 − 169

伯剌西爾時報社編（1933）『伯剌西爾年鑑 1933 年』、サンパウロ

ブラドC. Jr 『ブラジル経済史』（1970） 山田訳、昭和 47 、新世界社

Davis, John C.（1973） Statistical and Data Analysis, Wiley

福井英一郎編（昭 53） 『ラテンアメリカⅡ』朝倉書店
関口武・高木秀樹「ブラジル」の「ブラジルの人文」は高木秀樹

外務省編（昭 38） 「ブラジル」移民雑纂「日本外文書」第 45 巻第 1 冊、日本国際連合協会 pp. 403 ～ 428

Geografia do Brasil Vols. 1−5 (1977), I.B.E.G., Rio de Janeiro

花城清安（1980） 『私の戦後史』第四集、沖縄タイムス、pp. 271 − 303

半田知雄（昭和 45） 『移民の生活の歴史：ブラジル日系移民の歩んだ道』 家の光協会

泉 靖一編著（1958）『移民−ブラジル移民の実態調査−』 古今書院

James, Preston E.（1959） Latin America, Odyssey, N.Y.

香山六郎編（1949） 『移民四十年史』 グラフキカ、ブラジレイラ社、サンパウロ

Lind, Andrew W.（1938） An Island Community−Ecological Succession in Hawaii, The University of Chicago Press.

リーン・スミス（1954）『ブラジル・住民と制度 1, 2, 3』 高橋、持田訳（1961） 農林水産業生産性向上会議

前山 隆（1981） 『非相続者の精神史 −或る日系ブラジル人の遍歴− 』 御茶の水書房

大野盛雄・宮崎信江（1958）「小商品生産農家の成立過程」『移民 −ブラジル移民の実態調査』、古今書院 pp. 129 ～ 196

斎藤宏志（1959）「ブラジルにおける日系人の人口と地域移動」『南米研究』(6) pp. 26 ～ 32

斎藤宏志・中川文雄（昭 53） 『ラテンアメリカ現代史Ⅰ』 山川出版

芝 祐順（1972）『因子分析法』 東大出版

醍醐麻沙夫（1981） 『森の夢 — ブラジル日本人移民の記録』 冬樹社

田里友哲・中山　満・石川友紀・島袋伸三・目崎茂和（1981）　『南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究』琉球大学法文学部地理学教室

Tsuchida, Nobuya (1978) The Japanese in Brasil, 1908－1941, Ph. D. Dissertation, UCLA, University Microfilms International (Ann Arbor: 1980)